

地域主体の社会的処方モデルづくり ～広域避難者と地域をつなぐ新たな挑戦～

事業報告レポート

STRICTLYCONFIDENTIAL

2025年4月
NPO法人クロスフィールズ



CROSS FIELDS

- 当団体は、2024年8月に金沢市内に居住する高齢の広域避難者の孤独・孤立対策を目的にコミュニティづくり事業を開始した。同事業では、「社会的処方*1」のアプローチを用い、金沢市近郊に避難している高齢の広域避難者が集い、交流し、つながりを深める機会を提供した。具体的な取り組みは以下のとおり。
 - ①地域の団体との連携を通じた、居場所機能を持つ交流型イベント『笑語ひろば』の定期開催
 - ②市民リンクワーカー*2（以下、LW）の発掘・協働と地域資産*3の開拓
 - ③LWによる広域避難者のコミュニティ形成と地域参加の促進
- 2024年10月から2025年3月にかけて『笑語ひろば』を合計13回開催し、合計256名（延べ人数）が参加した。2025年3月に実施した調査の結果、同イベントが以下の3つの「効果」を発揮していることがわかった。
 - a. つらい体験や不安感軽減の場として
 - b. 共通の痛みを抱える人が安心して集い語り合える場として
 - c. 他者との新たなつながり形成の場として
- c. 他者とのつながり形成においては、参加者のうち7割以上が同イベントを通じて1名以上の新たな友人・知人を得ていた（各回1人当たり平均1.78名）。また、継続的なコミュニティ形成や地域参加につながった事例が20件以上確認された。
- 本事業に石川県在住のLW6名が第一期生として参画し、広域避難者及び地域資産とのつながりを形成する活動を行った。LWは現在も各々の活動を継続しており、2025年4月以降、自ら任意団体を立ち上げ広域避難者向けの居場所づくりを開始した例や、自団体に多世代の広域避難者及び地域住民向けの交流型イベントを企画運営する例など、活動の幅が広がっている。

*1：孤独・孤立の状態に陥っている、あるいはその可能性がある人に対して、地域活動などの社会参加の機会を”処方”し、その人が置かれている状況の改善や、その状況に陥ることを防ぐ取り組み。イギリスでは2016年から全国的なネットワークが構築され、既に様々な実践が成果を上げている。

*2：人や地域、地域資産へのつながりをつくる役割を持った人であり、社会的処方の実践における中心的存在

*3：地域のサークル活動や市民活動、居場所機能を持つ場所及び活動団体

背景

- 能登半島地震を受け、当団体は2024年2月より、石川県金沢市近郊に避難する二次避難者を対象に、孤独・孤立対策事業を開始。広域避難者を地域の交流拠点や居場所につなぎ、食事や物資の提供、心のケア、地域情報の共有などを通じて、避難生活における不安の軽減に取り組んだ。
- 当事者との対話を通じて、環境の変化への適応が難しい高齢の広域避難者の孤独・孤立のリスクが深刻化していること、またその高齢者を支える家族・親族等の若い世代にも心理的・物理的な負担が生じていることが明らかになった。
- こうした状況を受け、2024年8月、高齢の広域避難者の孤独・孤立を防ぐことを目的としたコミュニティづくり事業を開始した。

取り組む課題

高齢の広域避難者の社会的孤立と望まない孤独

- 被災に伴う様々な喪失体験
- 閉鎖空間での引きこもり・孤立状態
- 孤立に伴う運動機能・認知機能の低下やメンタル疾患への移行の危機

対象

金沢市及び近隣の市町に住む高齢の広域避難者（約1,900世帯、6,000人の内の約60%と推察*1）

事業概要

- 「社会的処方」のアプローチを活用し、地域の多様な団体や市民と連携することで、広域避難者が集い、つながり、交流できる場/機会を提供
- 「市民リンクワーカー」の発掘・協働を通じて、広域避難者によるコミュニティ形成と地域社会への参加を後押し

*1：2025年2月時点（金沢市社会福祉協議会からの情報を参考）

社会的処方

孤独・孤立の状態に陥っている、あるいはその可能性がある人に対して、地域活動などの社会参加の機会を”処方”し、その人が置かれている状況の改善や、その状況に陥ることを防ぐ取り組み。イギリスでは2016年から全国的なネットワークが構築され、既に様々な実践が成果を上げている。

市民リンクワーカー

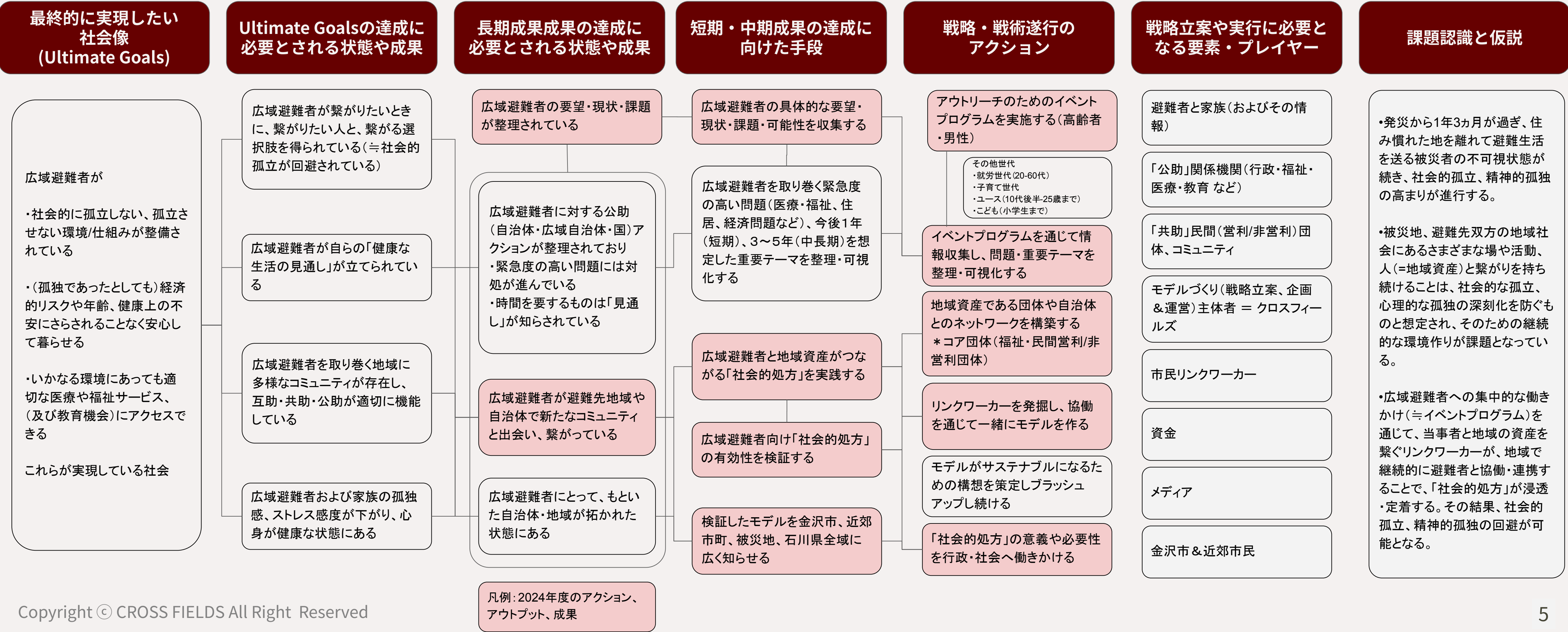
人や地域、地域資産へのつながりをつくる役割を持った人であり、社会的処方の実践における中心的存在。

地域資産

地域のサークル活動や市民活動、居場所機能を持つ場所及び活動団体。一般的には、地域資源という言葉が使われるが、当団体はこのような活動や場を地域のアセット（＝資産）と定義し、地域資産という言葉を用いる。

事業のロジックモデル

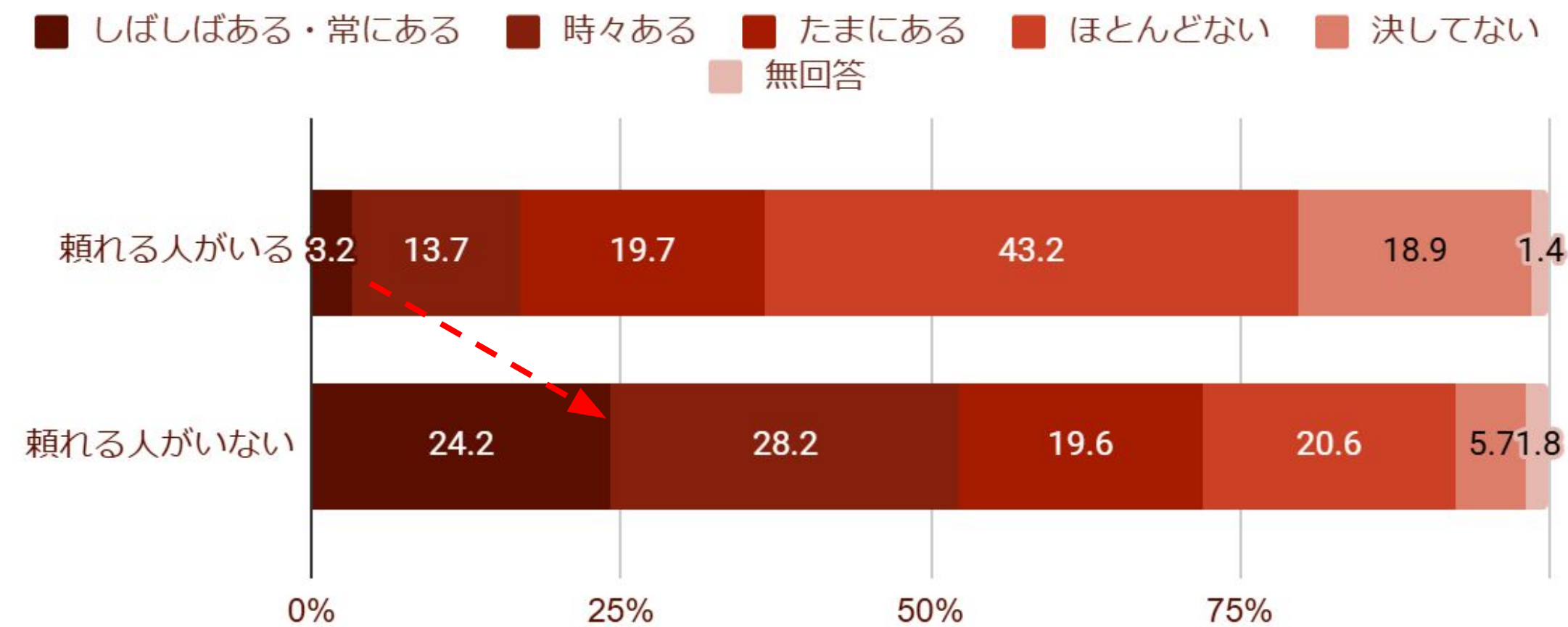
実現したいことへ至る道筋を描くため、事業開始時に「ロジックモデル」を策定。
2024年度の活動や成果を反映して2025年3月に一部更新。



仮説の背景となる先行研究(1)

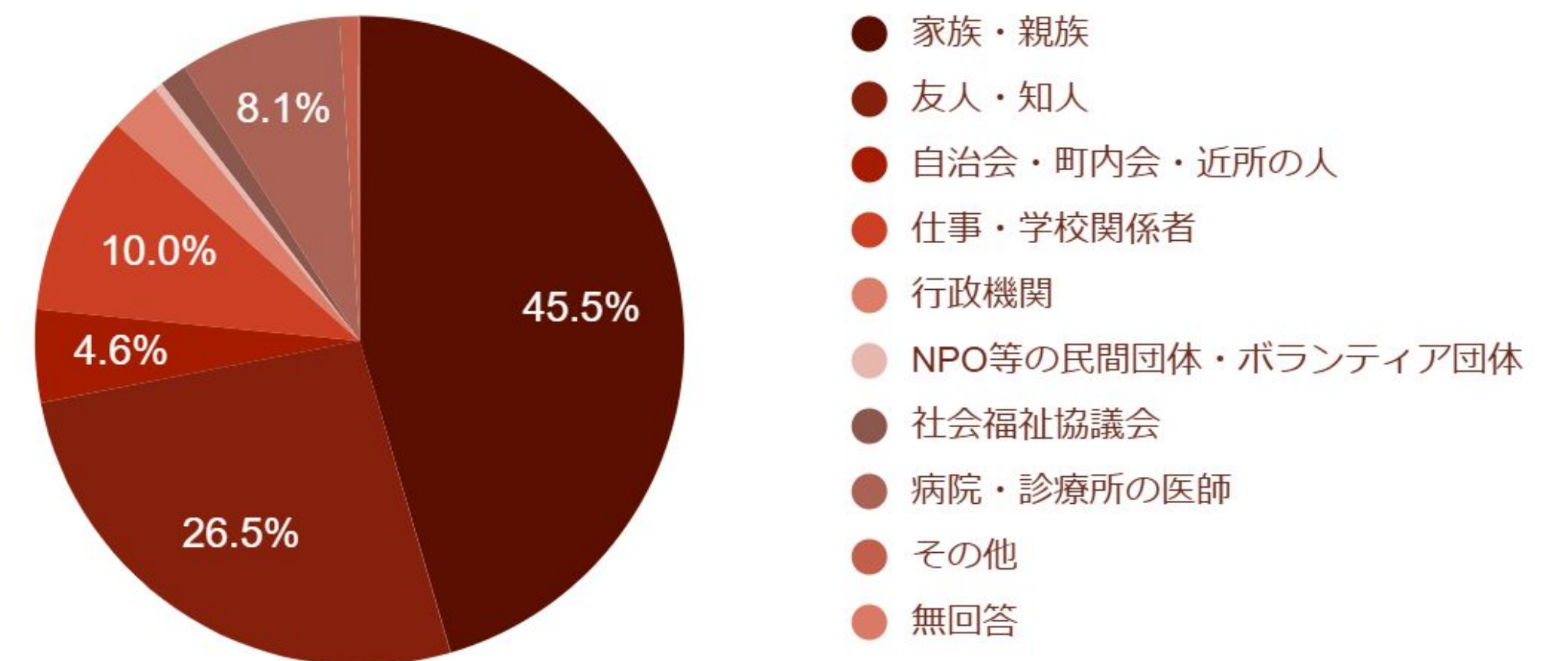
孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は、頼れる人が「いる」で3.2%、「いない」で24.2%（約7.5倍の差）

困ったときに頼れる人の有無別孤独感（直接質問）



困ったときに頼れる相手は、「家族・親戚」以外では「友人・知人」が最多の割合。高齢世代でも同様だが、「自治会・町内会・近所の人」の割合がより多くなる。

男女、年齢階級別困ったときに頼れる人の種類（複数回答）



出典) [人々のつながりに関する基礎調査（令和5年）](#)を元に作成

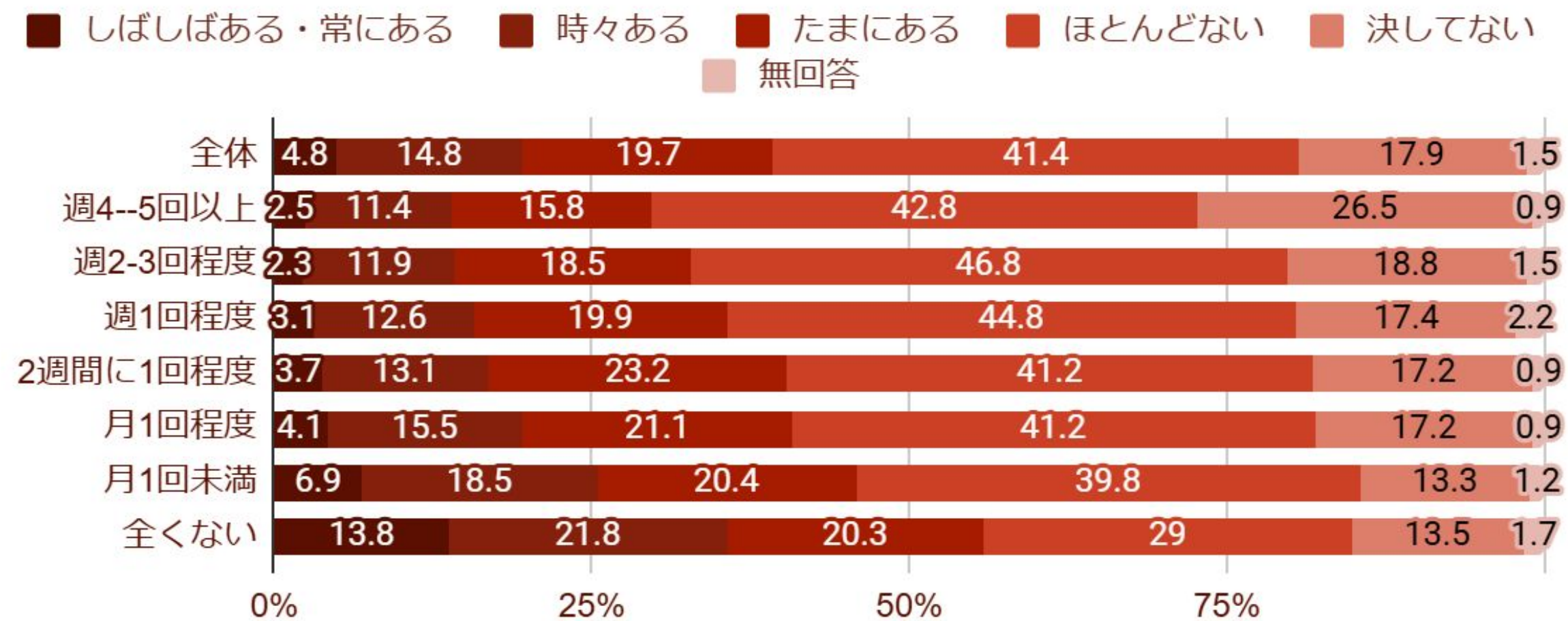
仮説①

広域避難者が、地域での友人・知人を増やすことが、孤独・孤立の予防に有効では？

仮説の背景となる先行研究(2)

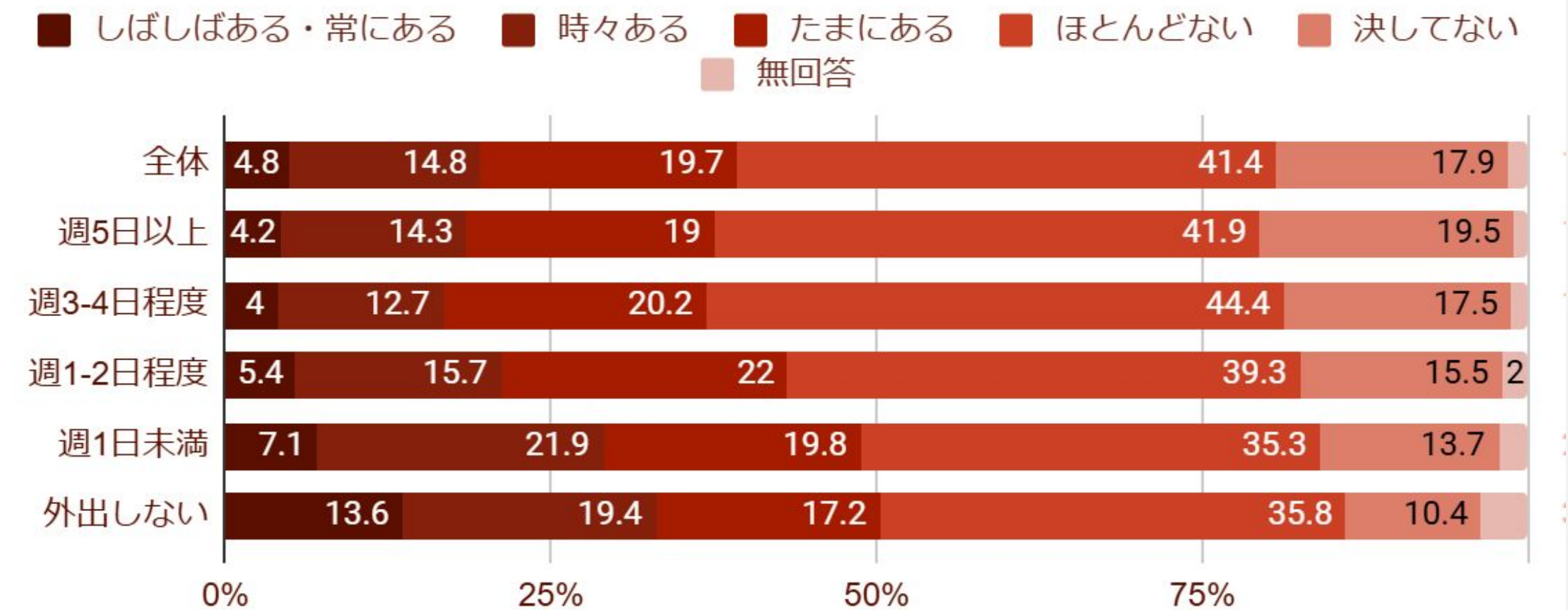
同居していない家族や友人たちとのコミュニケーション頻度が低いほど、孤独感を感じる人の割合が多くなっている。

「直接会って話す」頻度別孤独感（直接質問）



孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は、外出頻度が下がるほど高くなっている。

外出頻度別孤独感（直接質問）



出典) [人々のつながりに関する基礎調査（令和5年）](#)を元に作成

仮説②

広域避難者が「非同居者と直接会って話す」という外出機会を作ることが、孤独・孤立の予防に有効では？

仮説の背景となる先行研究(3)

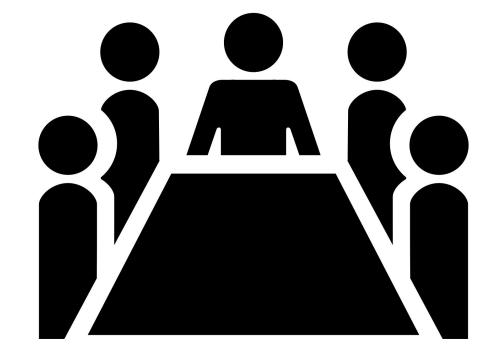
地域在住高齢者

地域在住高齢者を対象にした研究（岡本, 2021）では、週1回以上**社会活動**に参加している場合、または月に1～3回**ボランティア、趣味関係、スポーツ関係の活動**に参加している場合は、有意に孤立者が少なかった。年に数回でも**趣味活動**に参加している場合、有意に孤立者が少ないことがわかった。



被災地在住の高齢者

東日本大震災の被災地在住の高齢者を対象にした研究（山下ほか, 2021）では、**電話やメールでの交流を増やすことや、一人ではなく誰かと一緒に食事をするようにすること、何らかの社会活動に参加すること、生活の中で手助けをしてくれる人を増やしたり、相談環境を整えることは、孤独対策として有効である可能性があることが示されている。**



仮説 ③

広域避難者に対して、地域でのアクティビティへの参加や会食などの形で、定期的に対面での交流機会を提供することが、孤独・孤立の予防に有効では？

実施内容

STRICTLYCONFIDENTIAL



CROSS FIELDS

「社会的処方」のアプローチを活用し、地域の多様な団体や市民と連携することで
広域避難者が集い、つながり、交流できる機会を提供し
広域避難者による新たなコミュニティ形成や地域活動への参加につなげる活動を実施

①居場所機能を持つ交流型イベントの開催

- 「笑う」「語る」をテーマにした交流型イベント『笑語ひろば』の定期開催
- 高齢の広域避難者への情報発信とアウトリーチ活動



②市民リンクワーカーの発掘・協働

- LWの発掘と、研修・対話による協働関係の構築
- 『笑語ひろば』への参加を通じた活動の実践と、振り返りによる学びの蓄積
- 地域資産の開拓とネットワークの構築



③コミュニティ形成と地域参加の促進

- LWによる参加者との継続的な関わりを通じた信頼関係の構築
- ひとりひとりの価値観や興味関心、小さな願いを踏まえた人と人、人と地域のつながりの創出
- コミュニティ形成と地域参加の促進



参考：笑語ひろばウェブサイト：<https://hbpl.crossfields.jp/warakata-hiroba>

事業の活動 - (1)居場所機能を持つ交流型イベントの開催

活動の詳細

- 2024年10月から2025年3月にかけて、『笑語ひろば』を**13回***1開催。合計**256名**（延べ人数）が参加した。
- 月2～3回の頻度で、共に「**笑う**」と「**語る**」をテーマに食、演芸、能登の文化資産等の体験型及び鑑賞型コンテンツと茶話会を組み合わせ、各回2時間程度で開催。
- 開催場所は地域の図書館、銭湯、お寺等、**地域に開かれ日常的に訪れることが可能な交流拠点**とした。

工夫した点

- より多くの広域避難者に参加頂けるよう、企画・会場設計においては以下の3つの点を工夫した。
- **対象層の興味関心を引く企画の設計**
 - **対象者本人及び対象者を支援する家族親族への効果的なアウトリーチ**
 - **興味を持った人が自力で足を運べる開催場所・モビリティの確保**

他団体との連携

- 対象者への情報発信・アウトリーチにおいては、**石川県庁**（県内が広域避難者家庭に送付する定期連絡便へのチラシの封入）や**金沢市社会福祉協議会**（広域避難者の支援拠点『ルキーナ』でのチラシ配架、広域避難者家庭への巡回訪問時のチラシ配布協力）と連携した。
- 広域避難者向けの居場所づくりや見守りを強化するためには、広域（市単位）と地域（小中学校校区単位）での取り組みと相互の連携が重要であることから、社会福祉協議会が管轄する地域サロン運営者との情報交換・交流も行った。

*1：13回のうち、2回を石川県「能登半島地震地域コミュニティ再建事業」（令和6年度）、5回を内閣府「地域における孤独・孤立対策に関するNPO当の取組モデル調査」（令和6年度）、6回を社会福祉法人 中央共同募金会「ボラサポ・令和6年能登半島地震」の資金的支援を受けて開催した。

活動の詳細

- 2024年8月、社会的処方への認知向上と、本事業へのLWとしての参画希望者の発掘を目的としたイベントを金沢で開催し、約30名が参加。
- その後の面談を経て6名がLWが事業に参画。LWは福祉分野の専門職や地域活動に携わる人など多様なメンバーで構成された。
- 9月には一般社団法人ケアと暮らしの編集社の協力でLW向けの研修を実施。10月以降、LWは『笑語ひろば』への参加や、仕事・暮らしの延長での活動を通じて実践を積み重ね、月1回の振り返り会で学びを深めた。



工夫した点

実践にあたっては、LWの活動を「**広域避難者と『出会い』『つながり』『（地域資産に）つなげる』こと**」と定義し、その共通認識のもと実践と学習を重ねた。各段階での工夫は以下のとおり。

段階	工夫
出会う	対象である高齢の広域避難者の趣味や関心を意識し、 思わず参加したくなるようなイベント設計 に努めた。これにより、普段の生活では出会うことがない広域避難者同士やLWが、イベントへの参加を通じて 必然的に出会う場 の提供に取り組んだ。
つながる	支援する／されるといった一方的な関係ではなく、参加者に対して自己開示し、 フラットな関係を築くこと を重視。参加者の 小さな願い を受け止め、「 同じ目線で共に楽しむ 」姿勢を意識的に実践した。
つなげる	これまでの活動で、広域避難者のコミュニティ形成や地域参加につながる事例も一部生まれたが、『つなげる』活動の本格化はこれから。『つなげる』はKPIとして可視化しやすい一方、『出会い』『つながる』は時間を要するプロセスである。安易または性急な『つなげる』は、本事業の本質を損なう恐れがあるため、まずは 目の前の参加者を丁寧に受け止め、信頼関係を築き、継続的に関わることに重き を置いた。

事業の活動 - (3)コミュニティ形成と地域参加の促進

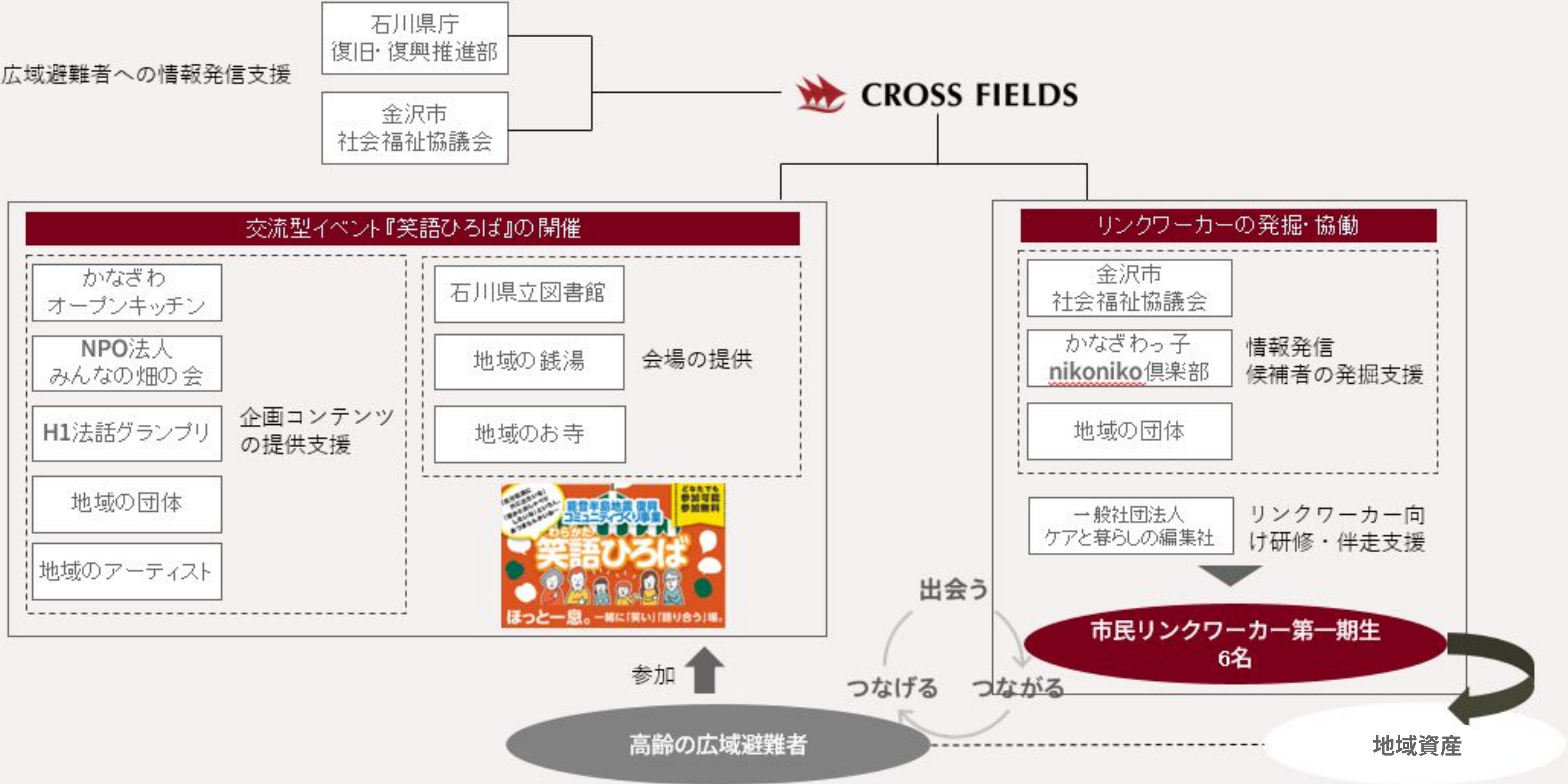
活動の詳細

- 『笑語ひろば』の情報が届いていない層へのアウトリーチ強化や、福祉とまちづくりの枠を越えた有機的連携の必要性を背景に、**LW自らが近隣の市町の社会福祉協議会や地域団体と情報交換を実施**。また、金沢市内の地域包括支援センターや民生委員との連携も模索しながら、**地域資産の開拓やネットワーク構築**に取り組んだ。
- LWは『笑語ひろば』の参加者と継続的に接点を持ち、対話を重ねて信頼関係を構築。困り事への対応にとどまらず、参加者の『**小さな願い**』に耳を傾け、地域資産の紹介や同行訪問を通じて、人と地域をつなぐ活動を実践した。
- こども食堂運営者や私設図書館・書店の経営者、地域の飲食店経営者など、地域で居場所づくりを担う人々にも『笑語ひろば』への参加を働きかけ、**広域避難者と地域の担い手が直接出会う機会**を創出した。

活動の様子



実施体制図



事業評価

STRICTLYCONFIDENTIAL



CROSS FIELDS

評価計画

- 「社会的処方」による孤独・孤立感の予防効果の評価を行うため、参加者の満足度に加え、「新たに出会った友人・知人の有無とその人数」を定量的な調査項目として設定。また個別インタビューやLWによる観察結果を定性的な評価項目として取り入れた。

イベントのアウトプット

- 交流型イベント『笑語ひろば』は期間中に計13回実施し、延べ256名が参加（1回あたり平均約20名）。新規参加者と継続参加者の割合は平均で41.4%と58.6%だった。
- 全体を通じて、女性が男性よりも参加割合が高く、男女とも、70代以上の参加者が最も多かった。避難元の居住地は輪島市、珠洲市の2市で66.5%を占めた。
- イベントの満足度は「大変満足」「まあまあ満足」との回答が93.4%を占め、全体を通じて高い満足度が認められていた。自由回答からは、イベントを通じた体験や交流が心の支えとなり、前向きな気持ちや安心感、楽しさをもたらしていたことが読み取れた。

イベントのアウトカム

- 参加者の7割以上が、イベントを通じて1名以上の新たな友人・知人を得ていた。延べ92名の参加者が合計164名の新たなつながりを形成しており、参加者1人あたり平均1.78名との新たな関係が生まれたことになる。
- 参加者本人への聞き取りや、LWによる継続的な対話・観察から得られた定性情報より、複数の広域避難者が『笑語ひろば』への参加をきっかけに、他の参加者やLWとの出会いを通じて心の様子や行動に前向きな変化が確認された。

広域避難者の生活に関すること

- 広域避難者にとって、住まいの確保は最も大きなハード面の課題の1つであることが分かった。また、帰郷の見込みについても「わからない」との回答が最も多くを占め、生活の見通しが立ちづらい状況が見えた。

評価計画のアプローチ

「社会的処方」による孤独・孤立感の予防効果の評価を行うため、交流型イベント（『笑語ひろば』）を実施し、その効果を検証するための評価計画を検討した。

- **孤独・孤立対策の観点**

参加者の満足度に加え、「**新たに出会った友人・知人の有無とその人数**」を定量的な調査項目として設定。また個別インタビューでの発言内容や、LWによる客観的かつ継続的な観察結果を定性的な評価項目として取り入れた。

- **広域避難者の課題の把握の観点**

広域避難者が抱える生活上の悩みや相談ごとは、今後の事業計画を検討する上で重要な要素となるため、先行データの不足を踏まえたうえで、意識的にそれらの情報収集も行った。

調査の種類	定量調査	定性調査
対象	2024年10月～2025年3月に実施したイベント『笑語ひろば』への参加者 (256名)	2024年10月～2025年3月に実施したイベント『笑語ひろば』への参加者 (7名) - LW (6名)
調査方法	紙面アンケート調査 (回収数：230、回収率 89.8%)	個別のデプスインタビュー（30-60分）
主要評価項目	交流型イベント『笑語ひろば』の実施とLWの関わりによる「社会的処方」のアプローチが、金沢市における広域避難者の孤独・孤立を予防あるいは軽減することができたか	
副次的評価項目	- 金沢市近郊の広域避難者の要望・現状・課題の収集を通じて、広域避難者を取り巻く中長期的な課題が整理されたか - 金沢市近郊におけるLWのコミュニティがサステナブルな営みになるための構想・企画・計画を策定できたか	

イベントの実績

イベント「笑語ひろば」の実施回数

13 回

イベントの参加者の人数

のべ

256 名

1回あたり平均

約 20 名

イベントへの新規・継続参加者の割合

新規

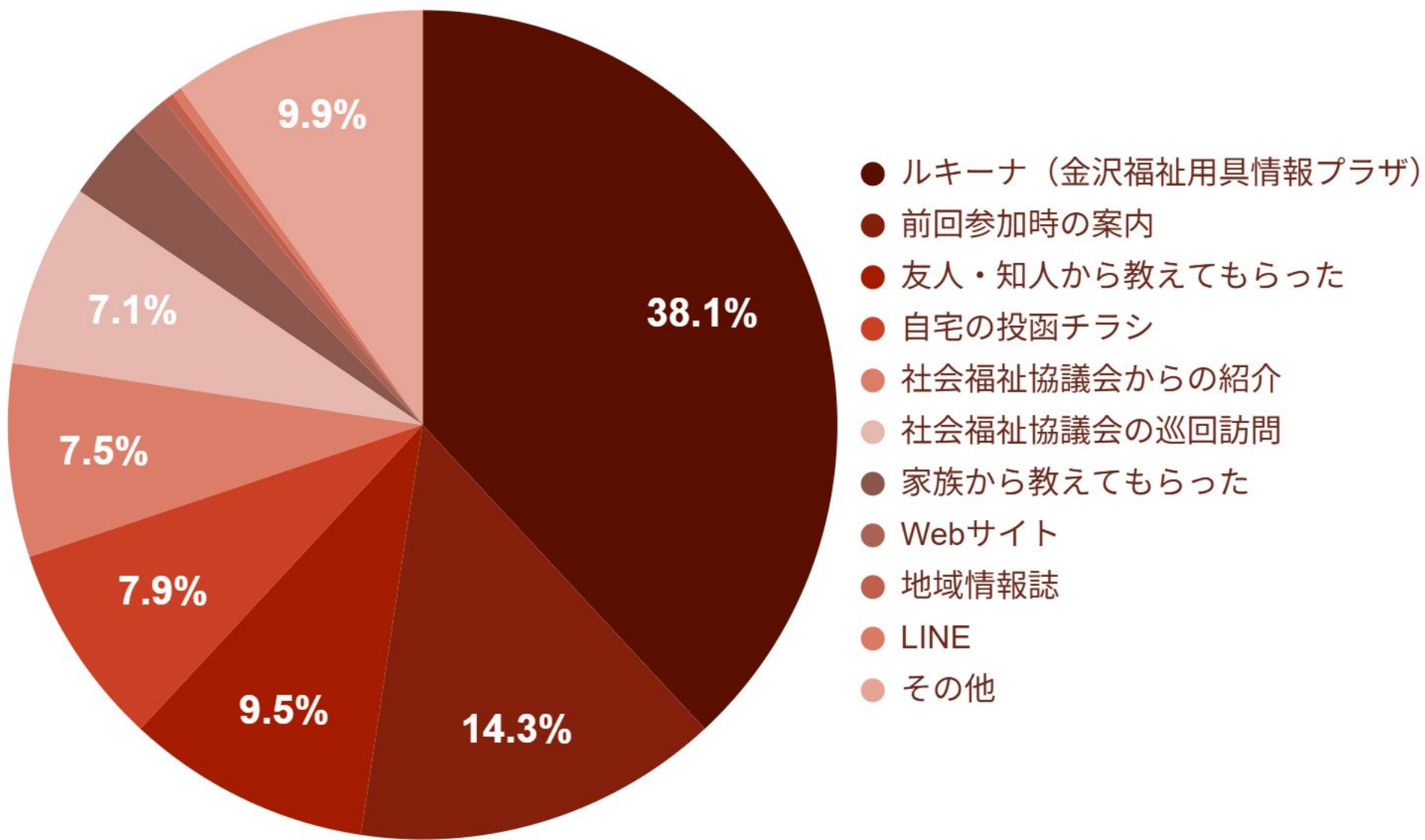
41.4 %

継続

58.6 %

イベントの認知経路

イベントの認知経路としてはルキーナ※が最も多く、参加時の案内、友人・知人経由が続いた。金沢市社会福祉協議会が関係する経路が多く認められた。

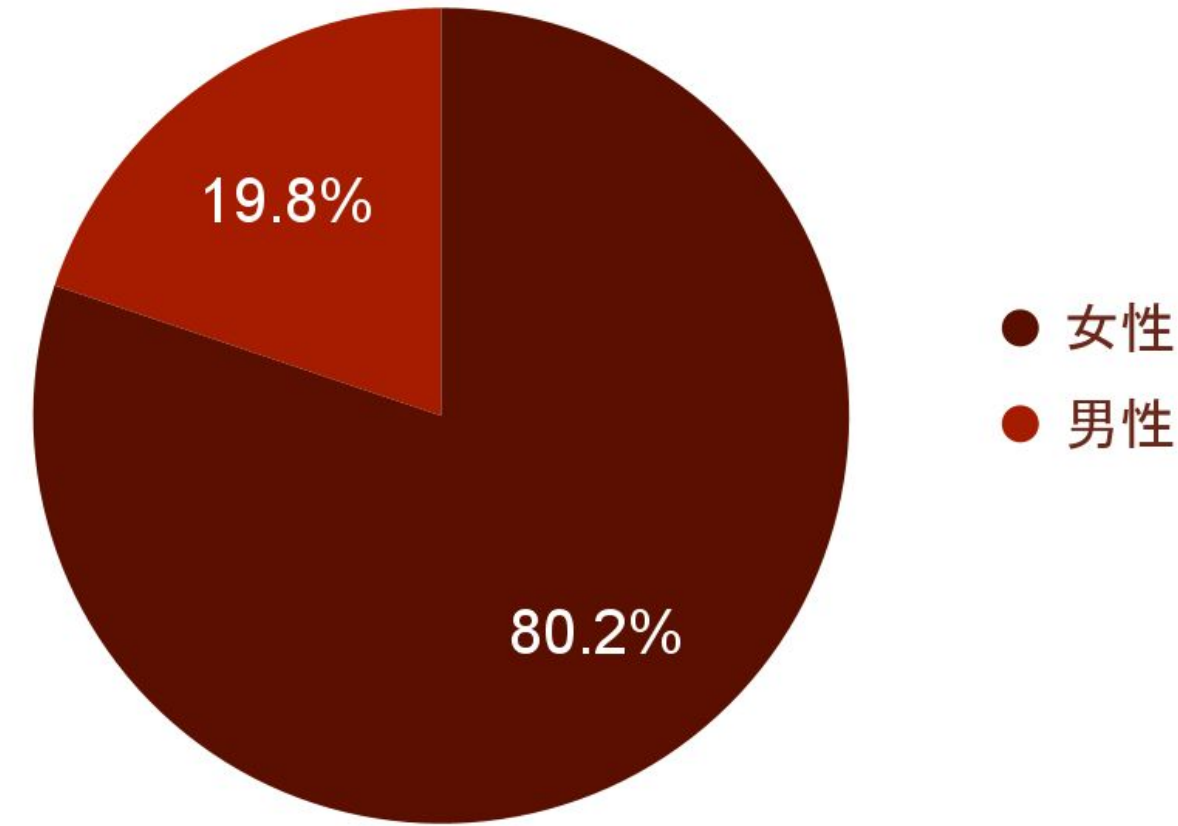


※ルキーナ（金沢福祉用具情報プラザ）では、金沢市社会福祉協議会が「あつまらんけ〜のと！」という能登半島地震で被災した広域避難者向けの支援・交流の場を定期的に開催している

イベント参加者の属性 (1)

性別

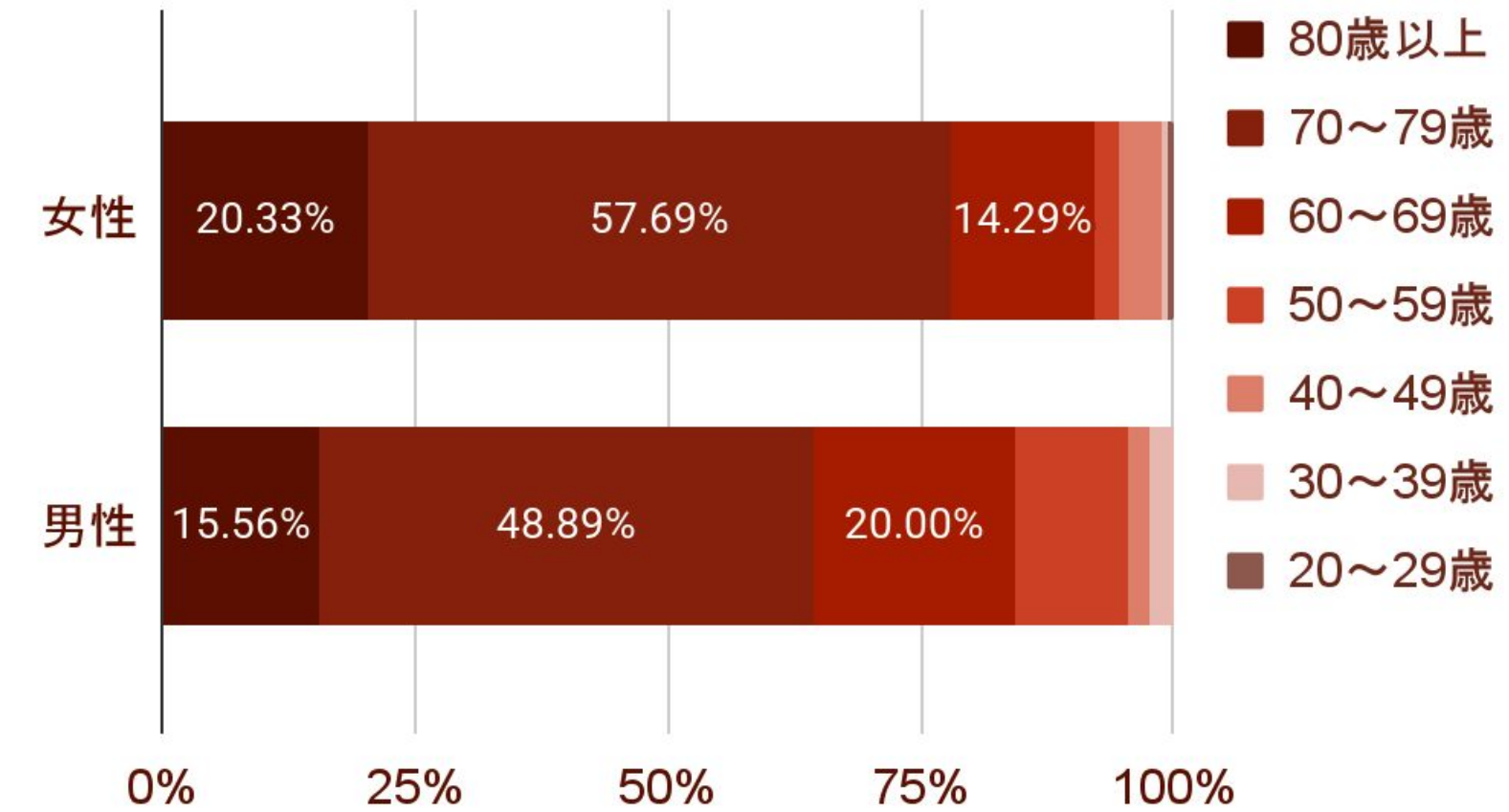
のべ回答者 (n=227)



全体を通じて、**女性**が男性よりも参加割合が高かった。

年代

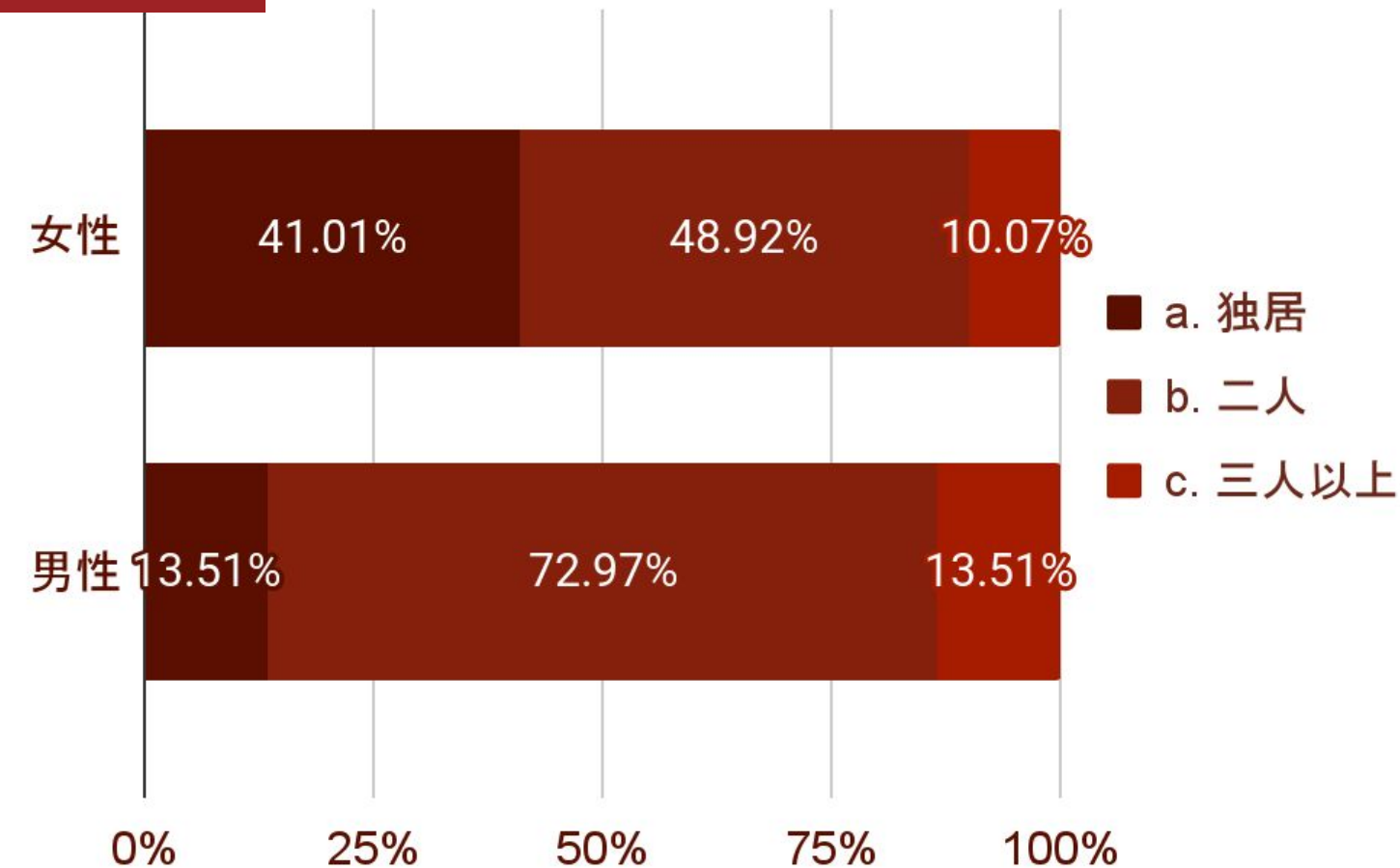
のべ回答者 (n=227)



男女とも、**70代以上**の参加者が最も多くを占めた。男性の方が年代が若干低い傾向があった。

世帯構成

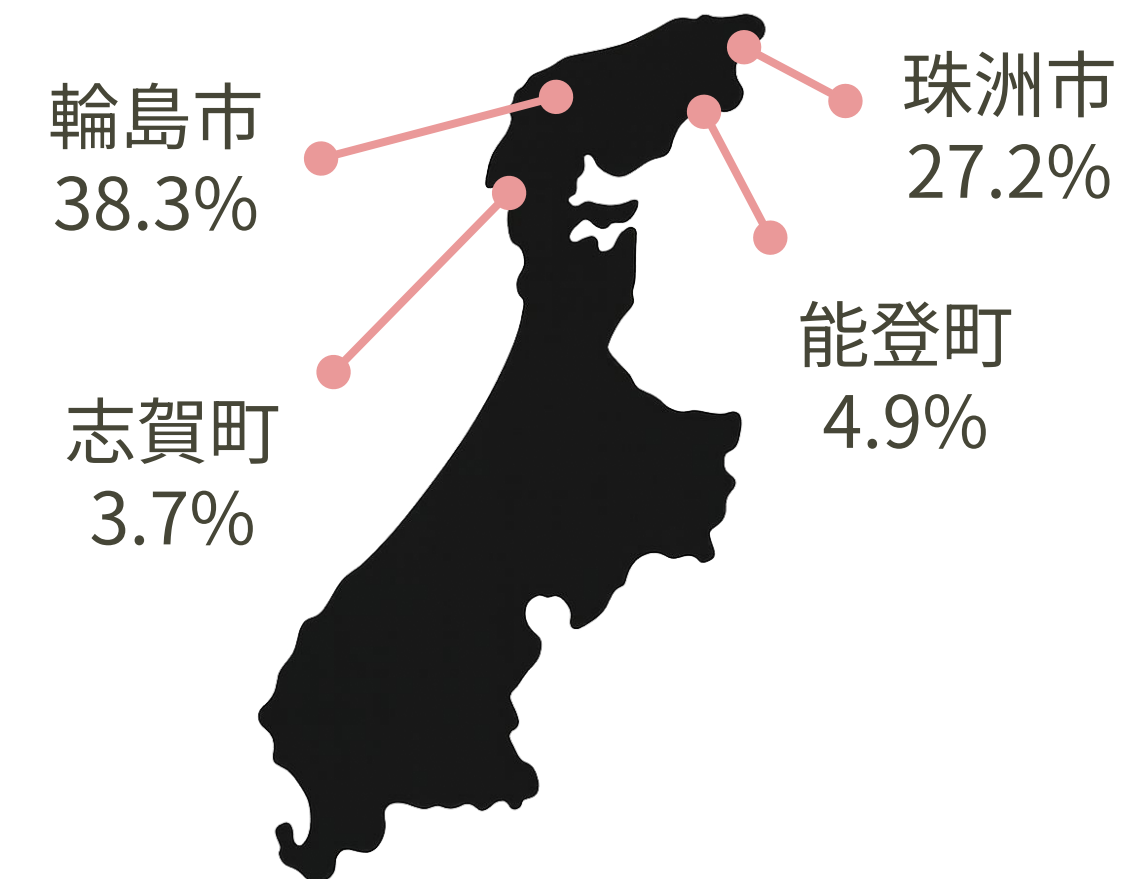
のべ回答者 (n=227)



男女とも**二人世帯**の参加が最も多かった。独居世帯の参加は、女性の方が多い傾向があった。

元の居住地（住民票のある市町村）

記名のあった広域避難者 (n=81)



避難元の居住地は**輪島市、珠洲市**の2市で66.5%を占めた。



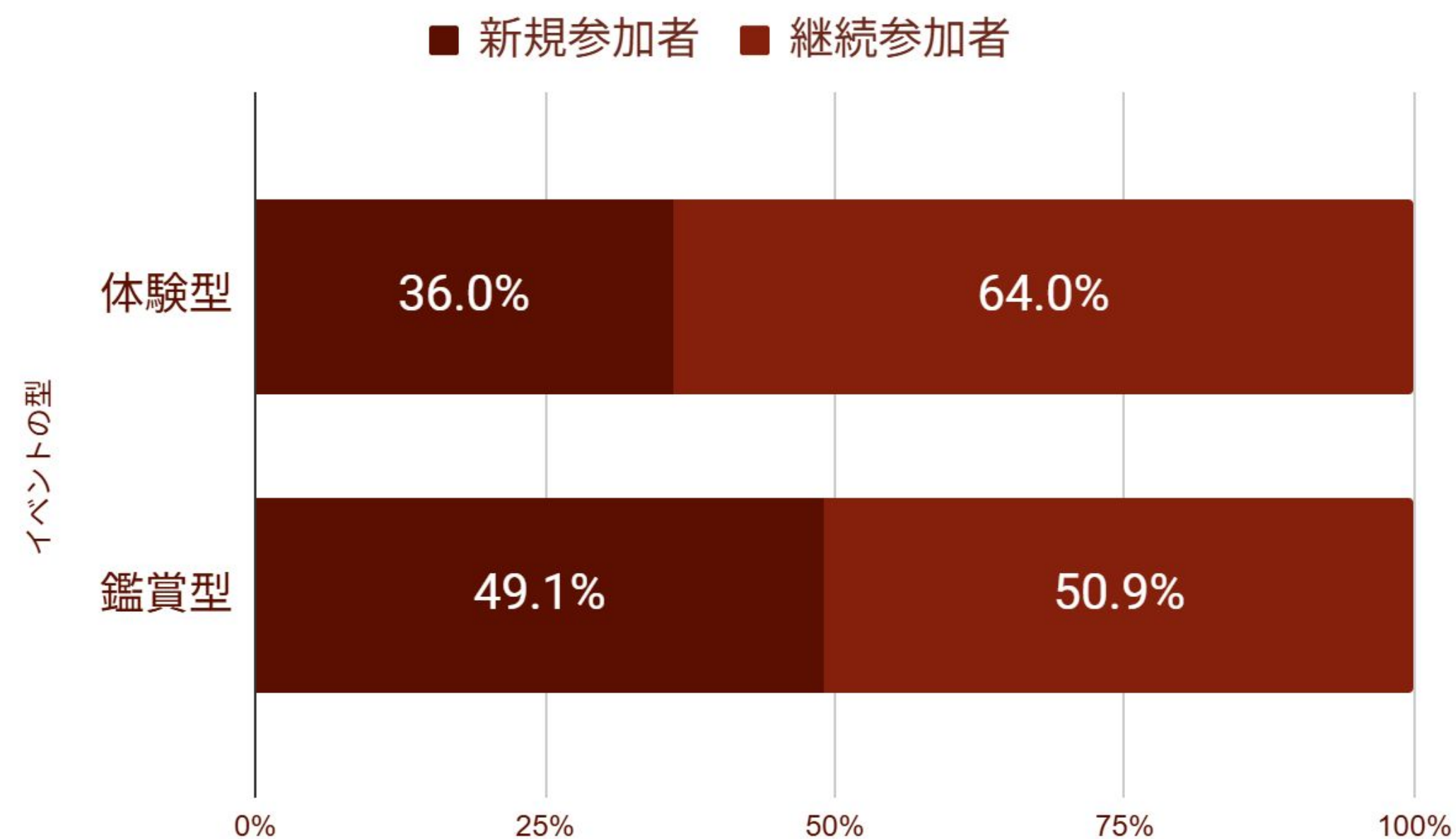
イベント参加者の属性 (2)

新規参加者については、主に鑑賞型イベント*への参加が多く確認されたのに対し、継続的な参加者は体験型イベント**への参加が多い傾向が見られた。また男性参加者については、体験型よりも鑑賞型への参加が比較的多かった。これらの傾向から、**鑑賞型は心理的参加障壁が相対的に低く、初回参加のきっかけとして機能していた可能性が考えられる**。その後家族や友人と体験型に参加するという段階的な関与が多く見受けられた。加えて、**男性にとっても鑑賞型は参加しやすいことが示唆される**。

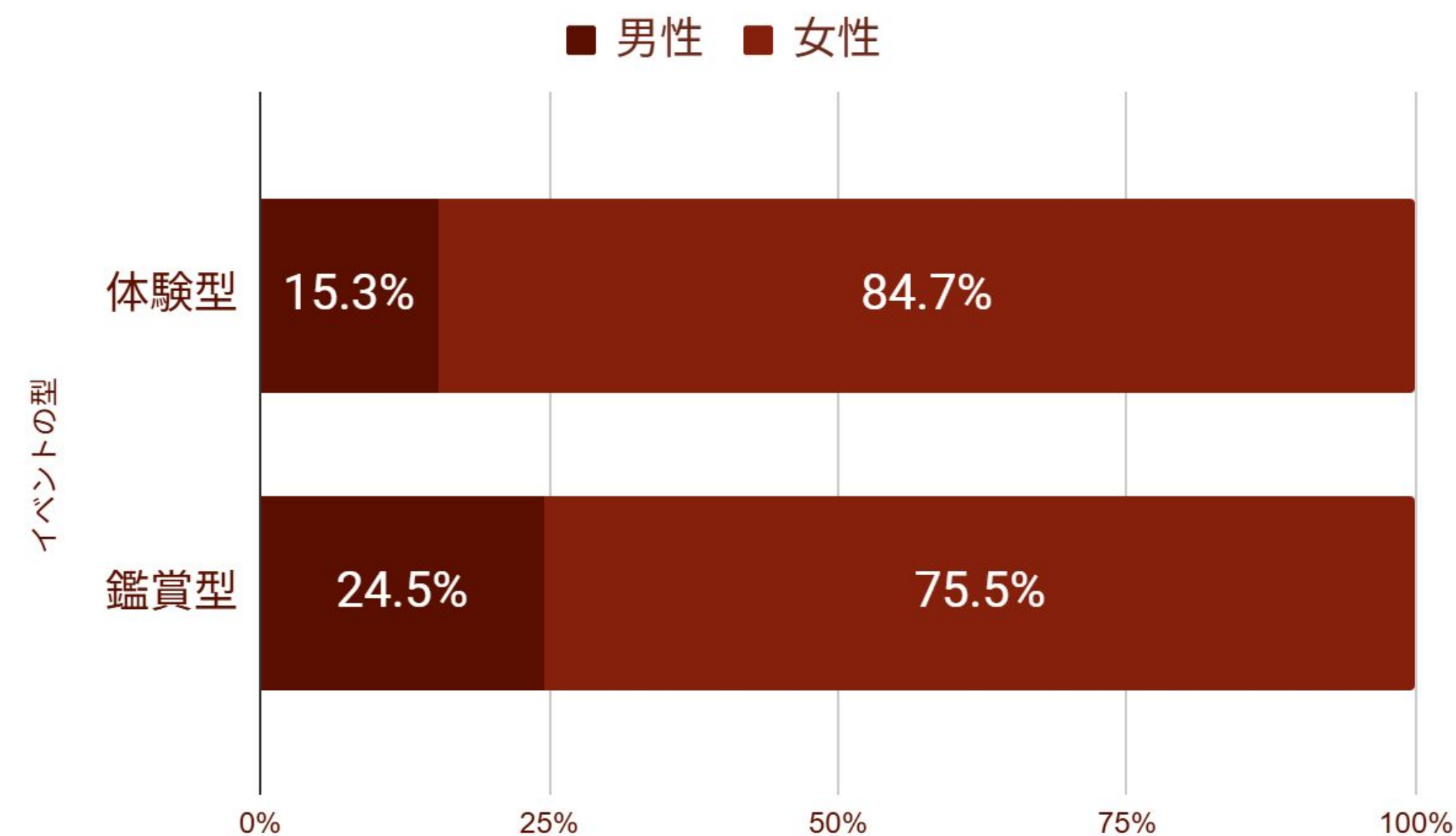
*鑑賞型イベント：法話、落語、マジックショーなど、催しの鑑賞を主な目的とするイベント。

**体験型イベント：料理や畑活動など、アクティビティの体験を主な目的とするイベント。

イベントの種別の参加者の新規/継続の割合



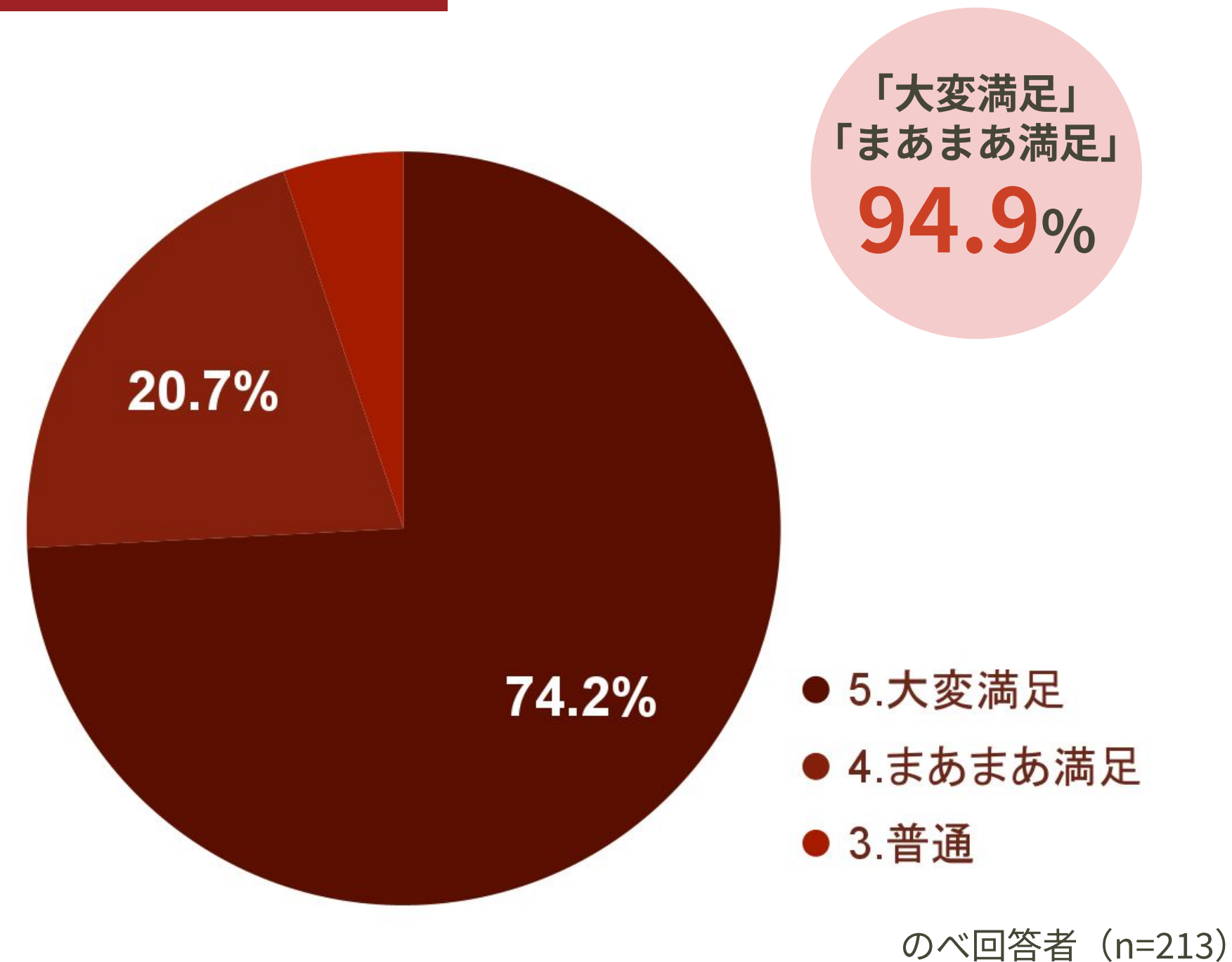
イベントの種別の参加者の性別の割合



イベントの満足度 (1)

イベントの満足度は「**大変満足**」「**まあまあ満足**」との回答が**94.9%**を占め、「満足ではない」との回答は0件で、全体を通じて高い満足度が認められていた。自由回答からは、イベントを通じた体験や交流が心の支えとなり、**前向きな気持ちや安心感、楽しさ**をもたらしていたことが読み取れた。心の回復や社会的つながりの再確認につながっている例も見られた。

イベントの満足度 (全体)

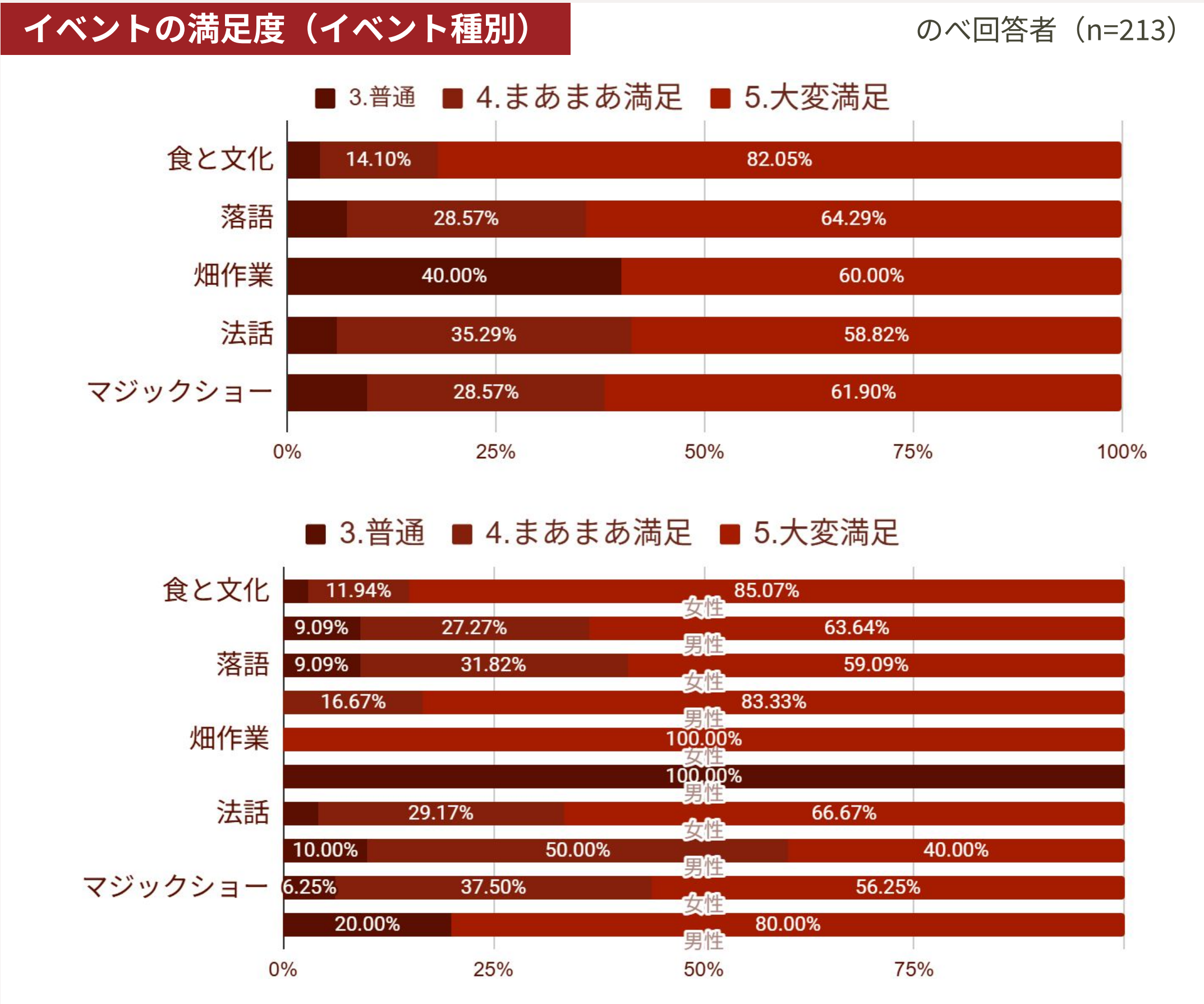
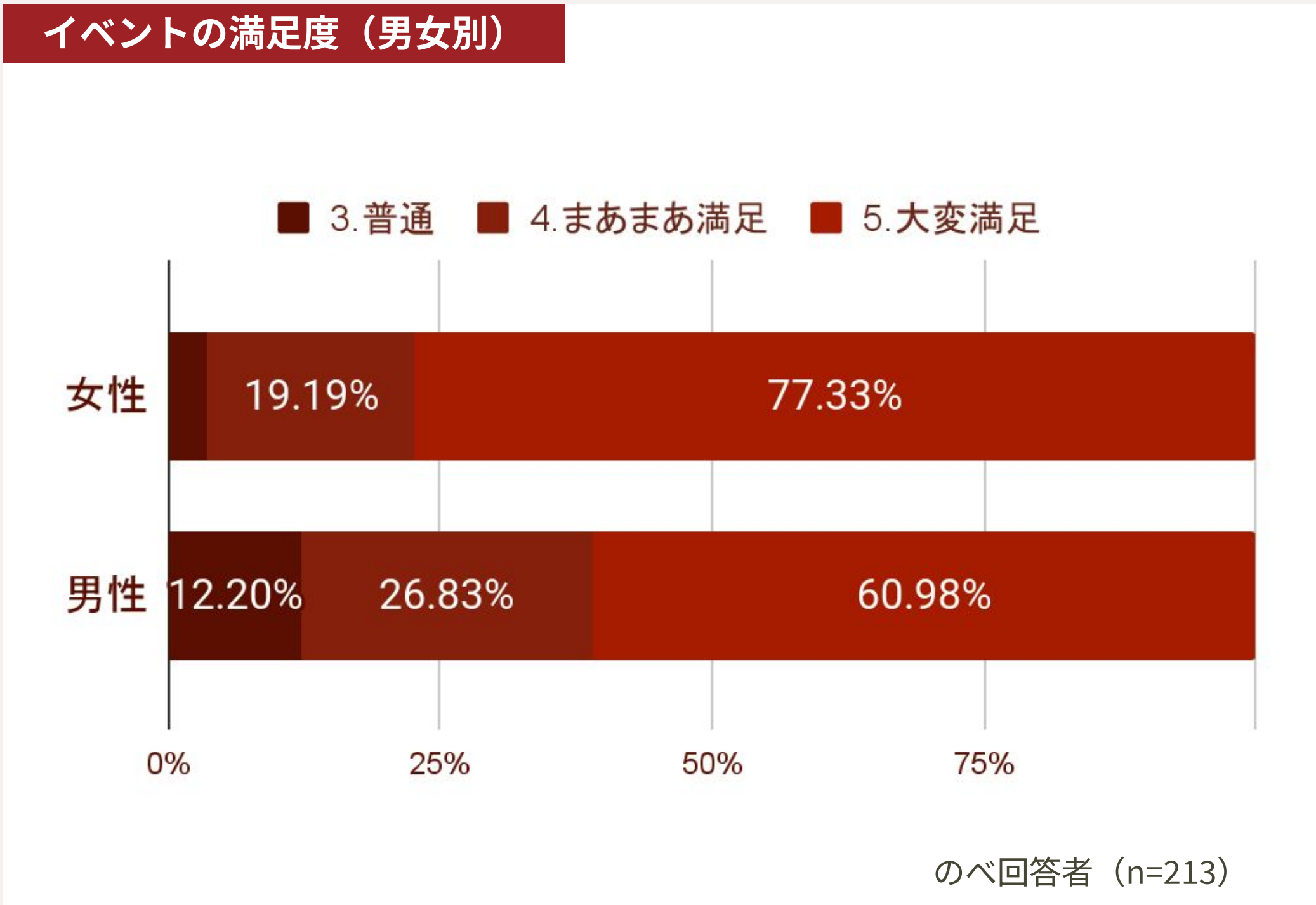


イベントの感想 (自由回答)

- 悲しい思いを笑いで吹き飛ばしていただきました(60代、珠洲市出身)
- 初めて輪島の人に会い、色々な話ができ楽しかったし大根寿司も美味しくいただきました(70代、輪島市出身)
- 少しずつ(参加回数が増えるごとに)会話が増え、楽しいし、美味しい食事も嬉しいです(60代、能登町出身)
- 周りの皆さん、そしてボランティアの方々に支えられて生きていることを再認識。前を向いて生きていこうと思えた(70代、輪島市出身)
- 落ち込んでいても大丈夫なんだと慰められた(50代、輪島市出身)
- 美味しい料理に大満足したことはもちろんのこと、同じテーブルの方々といろんなコミュニケーションを取れたことがとても楽しかった(60代、能登町出身)
- 珠洲のことが懐かしく良かった。皆の笑顔がステキ(70代、珠洲市出身)

イベントの満足度 (2)

全体的に、**女性**の方が男性よりもイベントの満足度が高い傾向が見られた。イベント種類別では、特に「**食と文化**」に関するイベントの満足度が高い傾向にあった。女性は「**食と文化**」「**法話**」、男性は「**落語**」「**マジックショー**」の満足度が高い傾向にあった。



アンケートや聞き取りを通じて、参加したいイベントに関する希望を丁寧に収集し、次回以降の企画設計に活用した。

次回に参加したいイベント	
種類	詳細
料理・食事関連	料理教室や手巻き寿司、海鮮丼などの具体的な提案、「食べるイベント」や「皆で料理作りたい」といった声
法話	法話の続編で、精神的な癒しや学びを求める声
体操・運動関連	軽い体操やヨガなど、身体を動かすイベントへの高い関心
音楽・歌関連	昭和歌謡曲やコンサート、一緒に歌う企画など、音楽を通じた癒しや交流を求める意見
お笑い・エンターテインメント関連	落語や漫才など、笑いを楽しむイベントへの期待
健康・ウェルネス関連	腸活など、健康や心身のバランスを意識した提案
学び・講座関連	スマホ講座や講演会など、実用的な学びや自己啓発を求める声
手工芸・創作関連	生け花や手芸、工作など、ものづくりを楽しむ提案
交流・社交関連	「みんなとワイワイ」など、集まること自体を楽しみたい
自然・季節イベント関連	花見など、季節感のあるイベントへの関心

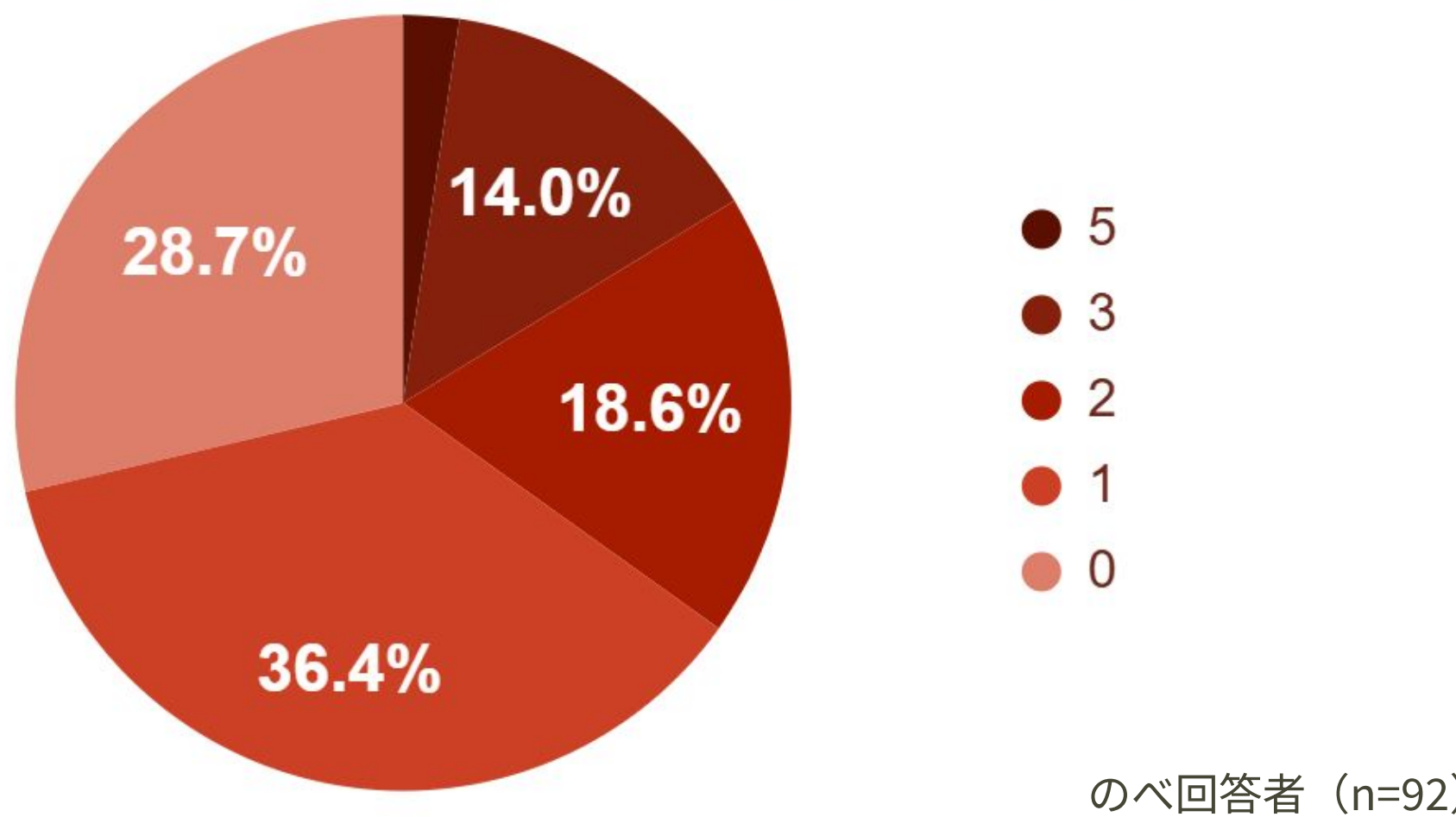
アウトカム - イベント参加者の新たなつながり

主要評価項目に関わる部分

参加者の**7割以上**が、イベントを通じて1名以上の新たな友人・知人を得ていた。具体的には、延べ**92名**の参加者が合計**164名**の新たなつながりを形成し、参加者1人あたり**平均1.78名**との新たな関係が生まれた。この背景には、毎回のイベントで意図的に交流時間を設けたことに加え、初期段階でのお互いを知ったり話を始めるきっかけとしてのチェックインの実施、卓をまたいだレクリエーションや、ランダムな席配置するなど、**他者との接点を促す工夫**が有効に機能していたと考えられる。

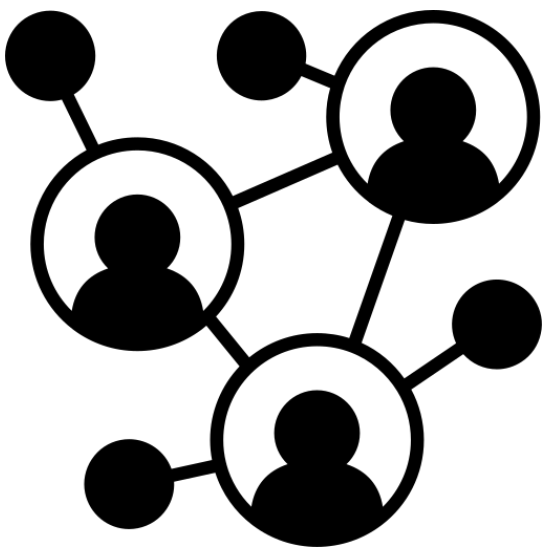
一度のイベントで新たに増えた知人・友人の数（名）

- **7割以上**の参加者が最低1名以上の知人・友人を得ていた
- 1回あたりの最多の増加人数は**5名**。一人あたりの累計では最多で**11名**の増加人数だった（輪島市出身、80代女性）



イベントで新たに増えた知人・友人の数（名）

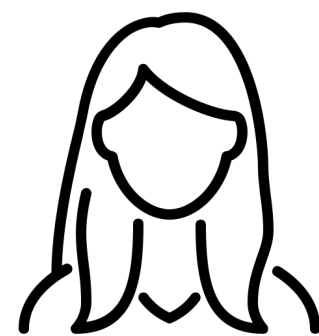
	参加者数	新たな知人・友人数	平均
延べ人数	92名	164名	1.78名/参加者
記名のあった参加者	56名	125名	2.23名/参加者



アウトカム - イベント参加者に生じた変化 (1)

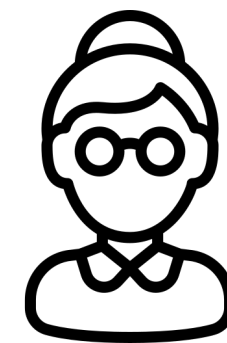
主要評価項目に関わる部分

本人への聞き取りや、LWによる継続的な対話・観察から得られた定性情報より、複数の広域避難者が『笑語ひろば』への参加をきっかけに、**他の参加者やLWとの出会いを通じて前向きな心や行動の変化に様子を確認された。**



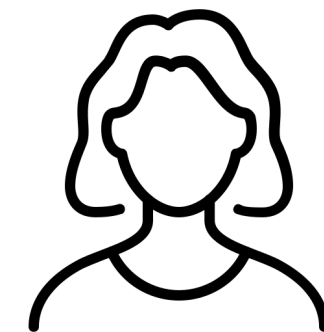
70代 女性 野々市市在住

『笑語ひろば』で野々市市のこども食堂を運営する男性と出会ったことをきっかけに、「**外に出る機会を探していた**」と語る参加者本人がこども食堂に関心を持つようになった。後日、運営者と連絡を取り合い、同じく野々市市に避難していた妹と共にこども食堂に参加。**その後も継続してボランティアとして関わっている。**



70代 女性 珠洲市出身

能登の避難所や広域避難先での対人関係による深刻なストレスや、被災した自宅の公費解体による喪失感を抱え、心身ともに塞ぎ込んでいたが、「外に出なければ」との思いから近隣の銭湯で開催された『笑語ひろば』に参加。その後、法話の回にも参加し、「**こんなことをしてはだめだ**」と前向きな気持ちを取り戻し、「まずは家の外に出る機会を増やすことが大切だ」と考えるようになった。
『笑語ひろば』への継続的な参加を通じて新たな友人ができ、公共交通機関の利用など、日常生活の中で小さな挑戦を重ねるうちに、行動範囲の広がりといった変化が見られた。

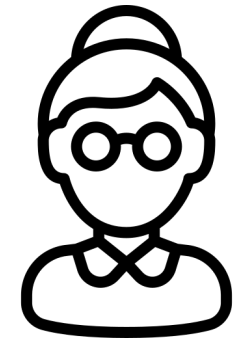


70代 女性 輪島市出身

2025年1月の法話の回に参加し、登壇した僧侶の優しさとユーモアに満ちた語りに触れ、「**この一年間、感情を失っていたが、一年ぶりに心から笑うことができた**」と語った。この言葉を同じ卓で聞いたLWは、こうした心の変化こそが本事業における最も重要な成果の一つだと述べている。その後、参加者はLWとのつながりをきっかけに、**同LWが立ち上げた編物カフェに定期的に参加するようになった。**

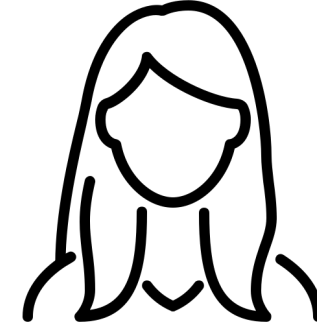
アウトカム - イベント参加者に生じた変化 (2)

主要評価項目に関わる部分



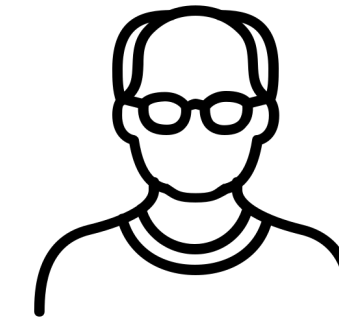
80代 女性 羽咋市在住

『笑語ひろば』で知り合った同年代の参加者が「地域でボランティアをしたい」と話すのを聞き、自らも勇気づけられ、**羽咋市社会福祉協議会の傾聴ボランティアに申し込んだ。**
伴走していたLWはこの変化について、「**同じ被災者の意欲や行動に背中を押され、自分も行動できたこと、さらにそれが他の人の勇気につながる可能性に喜びを感じているようだった**」と語った。



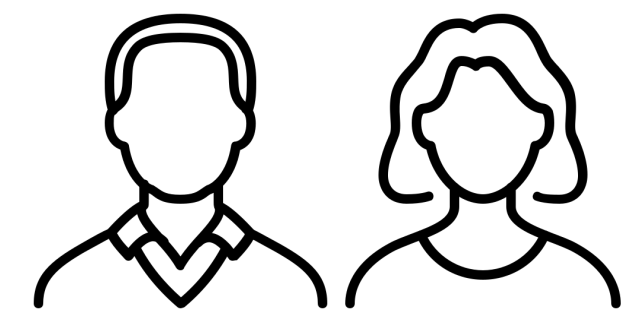
50代 女性 輪島市出身

『笑語ひろば』への初参加以降、回を重ねるごとに様子や態度に前向きな変化が見られた。初回は複数の課題を抱え、深刻な表情だったが、**2回目には声のトーンも明るくなり、むしろLWを気遣う発言もあった。**LWはこの変化について、「**良い方々に囲まれる中で、安心して自ら様々なことを決められるようになってい**るのでは」と語り、**本人の主体性や自己効力感の高まり**が感じられた。



80代 男性

以前は毎日畑仕事をしていましたが、金沢への避難後は作業環境がなく、家に閉じこもりがちだった。
『笑語ひろば』への参加をきっかけに、市民農園を運営する地域のNPO代表と出会い、**その団体が管理する市民農園で畑仕事を再開することになった。**



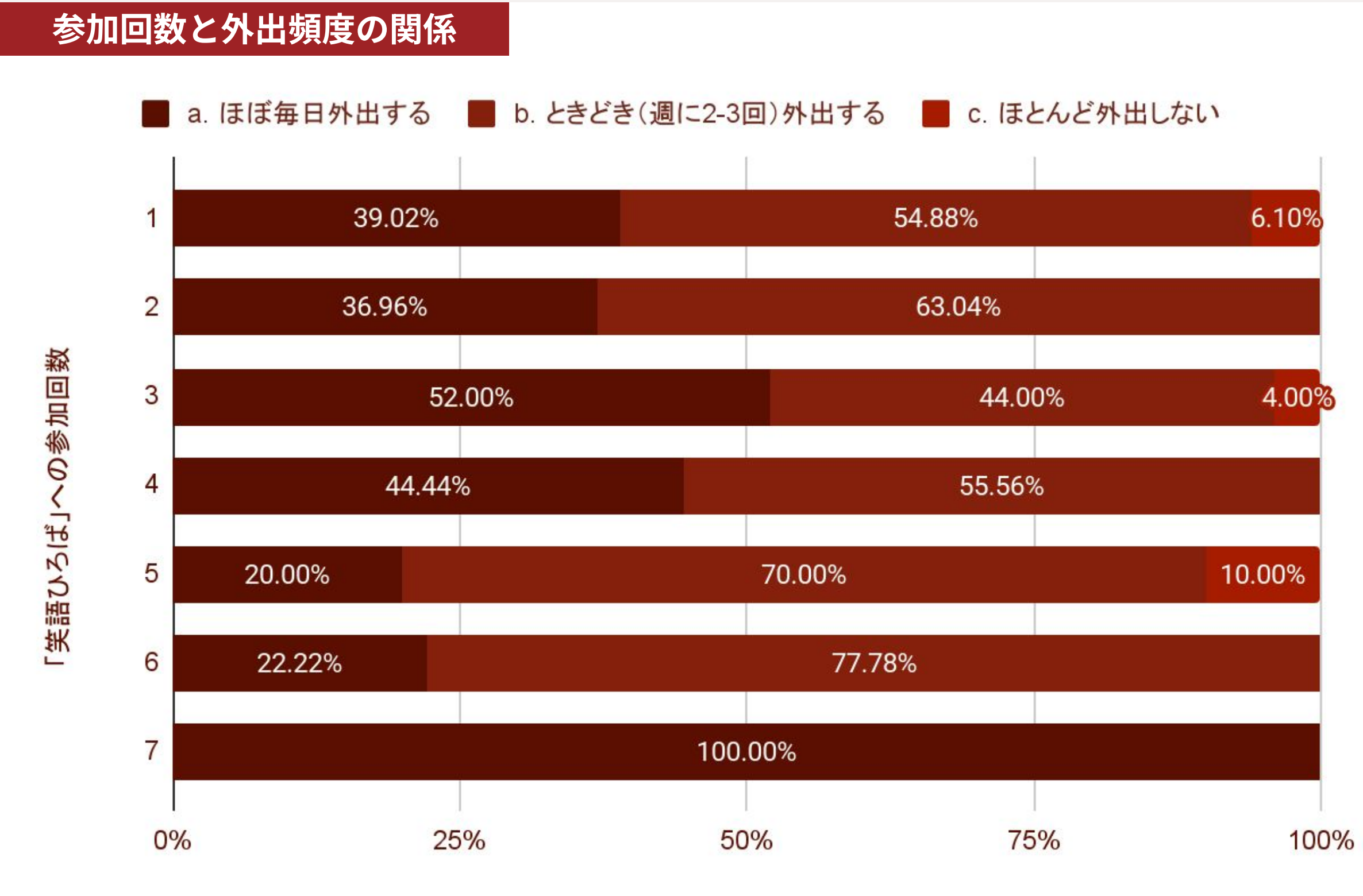
70代 夫婦 輪島市出身

初回の『笑語ひろば』以降、毎月参加。最初は夫婦ともに雰囲気は堅く口数も少なかったうえ、食をテーマにした回では試食だけして早々に帰ることも。
しかし、回を重ねるごとに**表情が和らぎ、会話も増え、夫婦が各々参加者と自由に会話するよう**に。現在ではご夫人はLW主催の編み物カフェにも通い、人生で初めての編み物に熱中している。

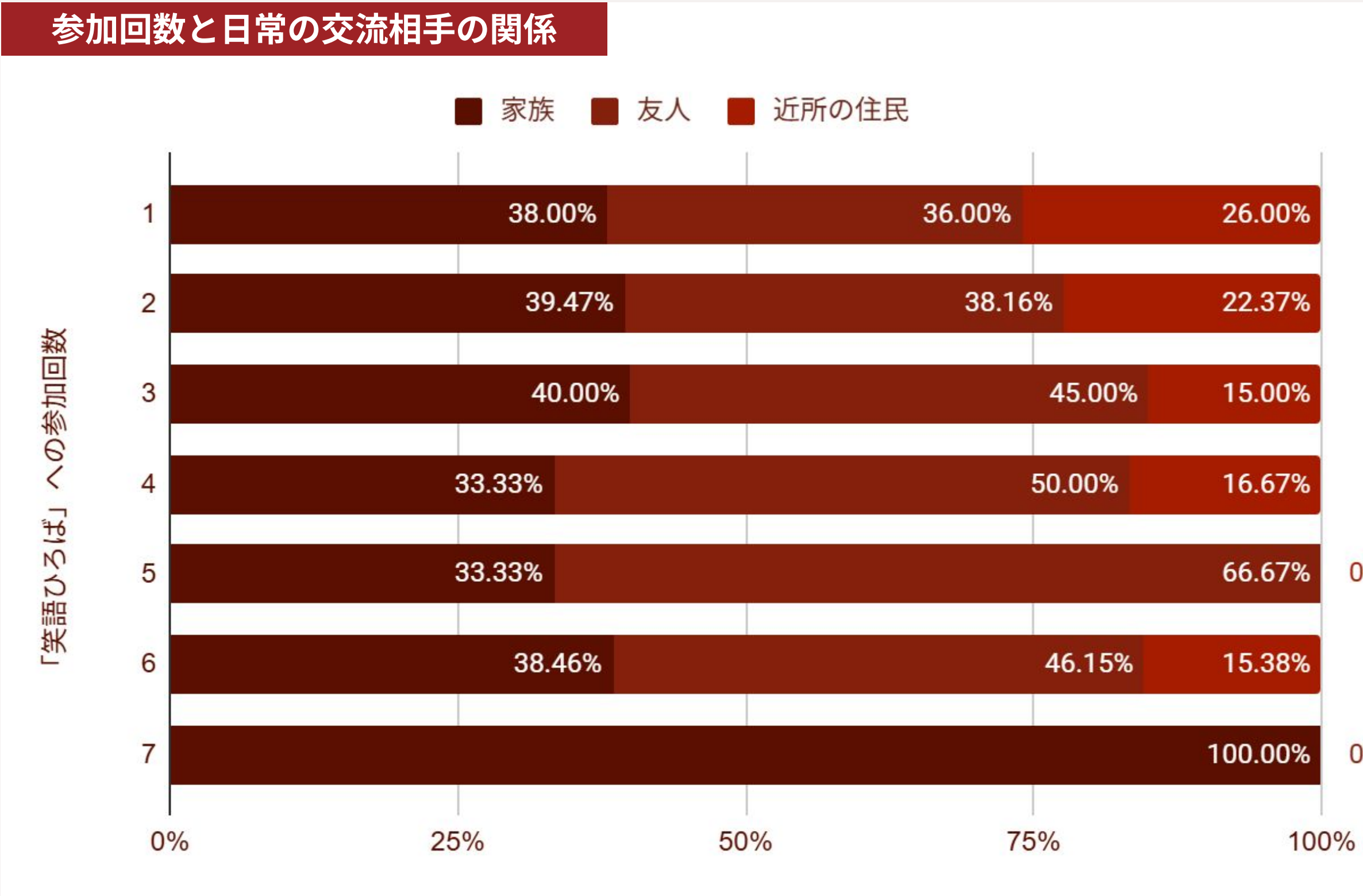
アウトカム - イベント参加者の外出頻度と日常の交流相手への影響

主要評価項目に関わる部分

イベントへの参加をきっかけに外出頻度が増え、対人交流機会が広がるという仮説に対しては、参加回数と「**外出頻度**」や「**日常で交流する相手**」の相関は認められなかった。



のべ回答者 (n=182)



(n=230)

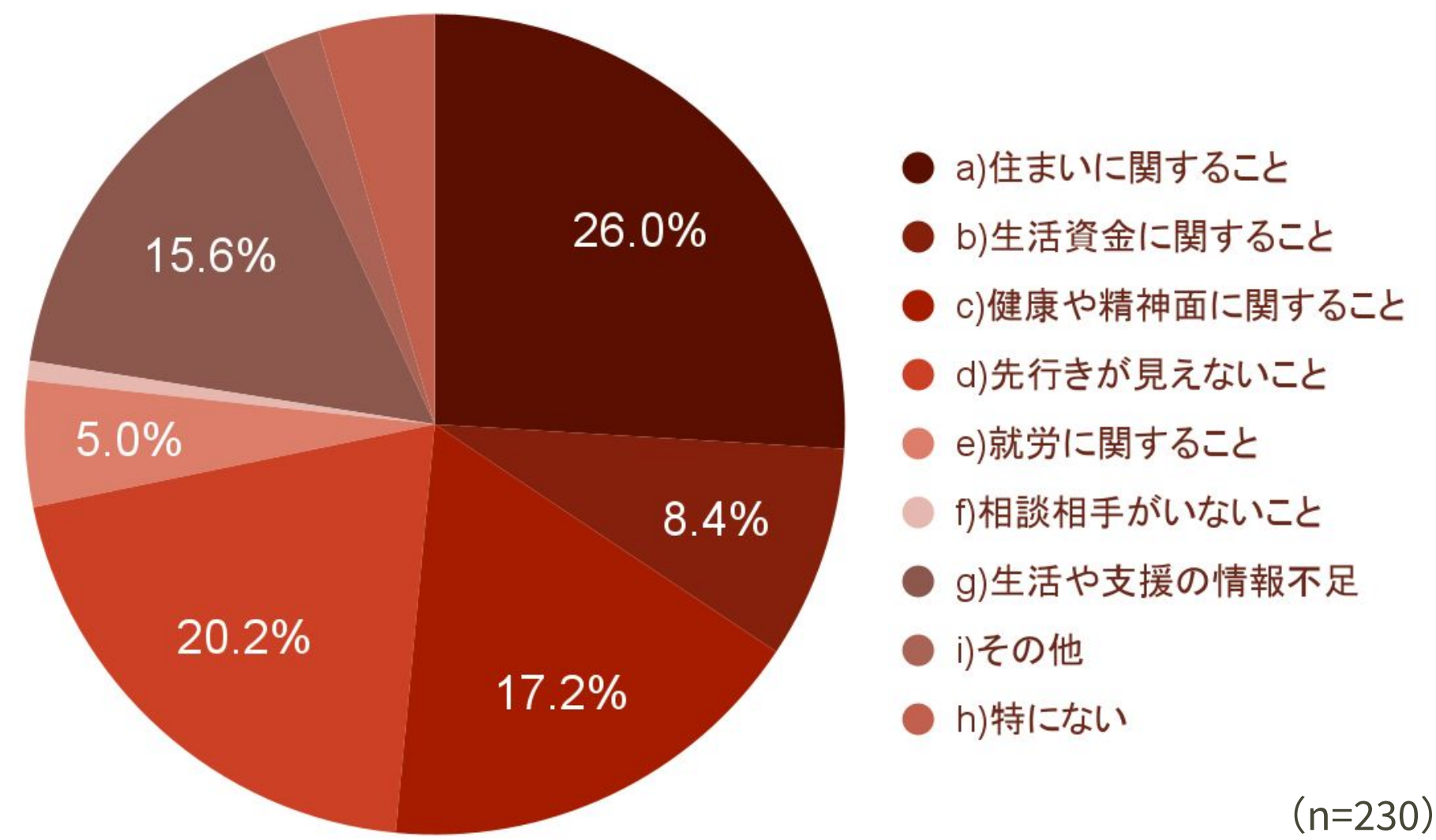
アウトカム - イベント参加者の生活の困りごとと見通し

副次的評価項目に関わる部分

広域避難者にとって、**住まいの確保**は最も大きなハード面の課題の1つであることが分かった。また「先行きが見えない」「わからない」との回答が多かったことから、**生活の見通しが立ちづらい状況**が見えた。

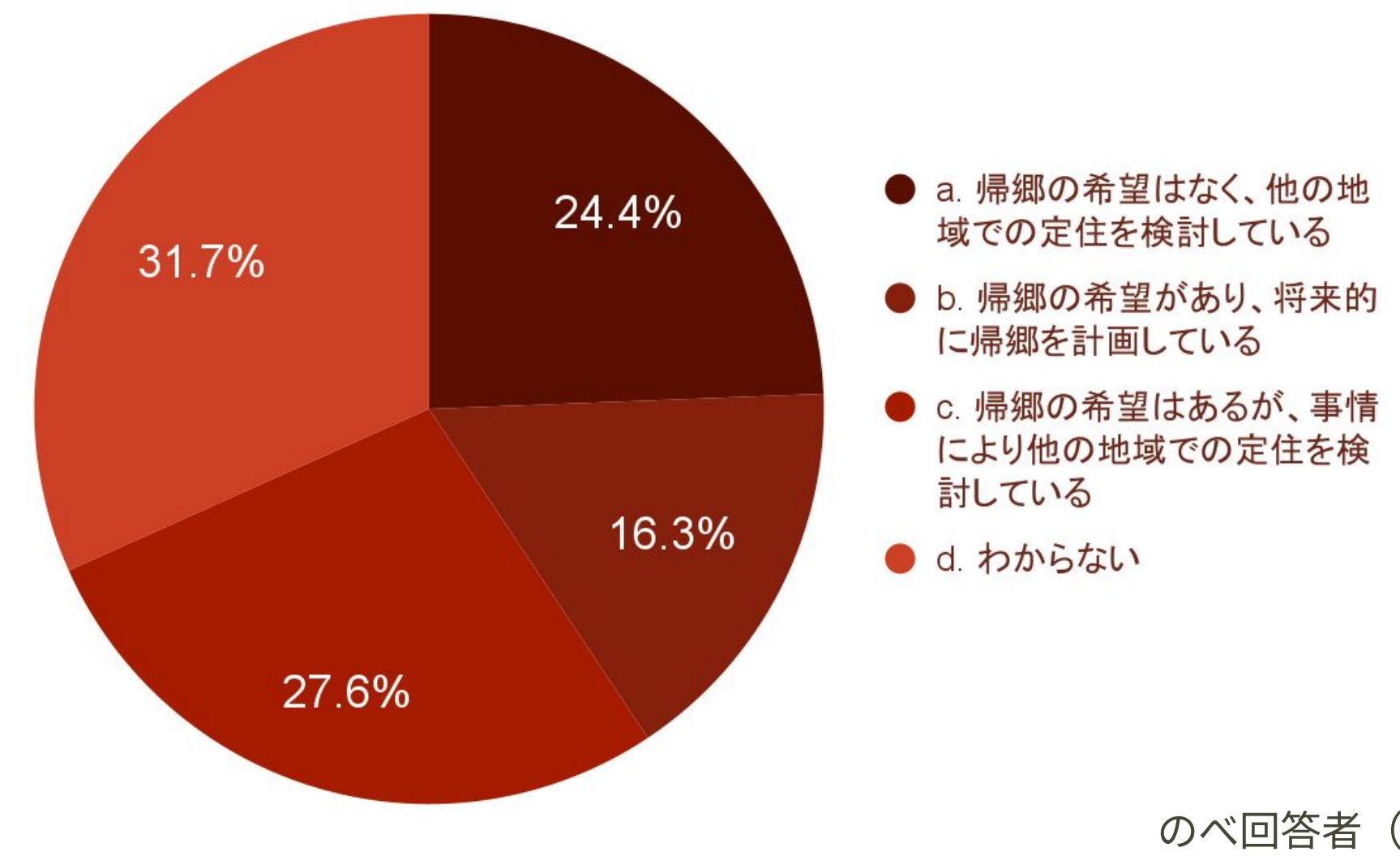
避難先の生活に関して相談したいこと

現在の生活で相談したいことは、「**住まいに関すること**」が最も多く約1/4を占め、「**先行きが見えないこと**」「**健康・精神面に関すること**」「**生活や支援の情報不足**」が続いた。



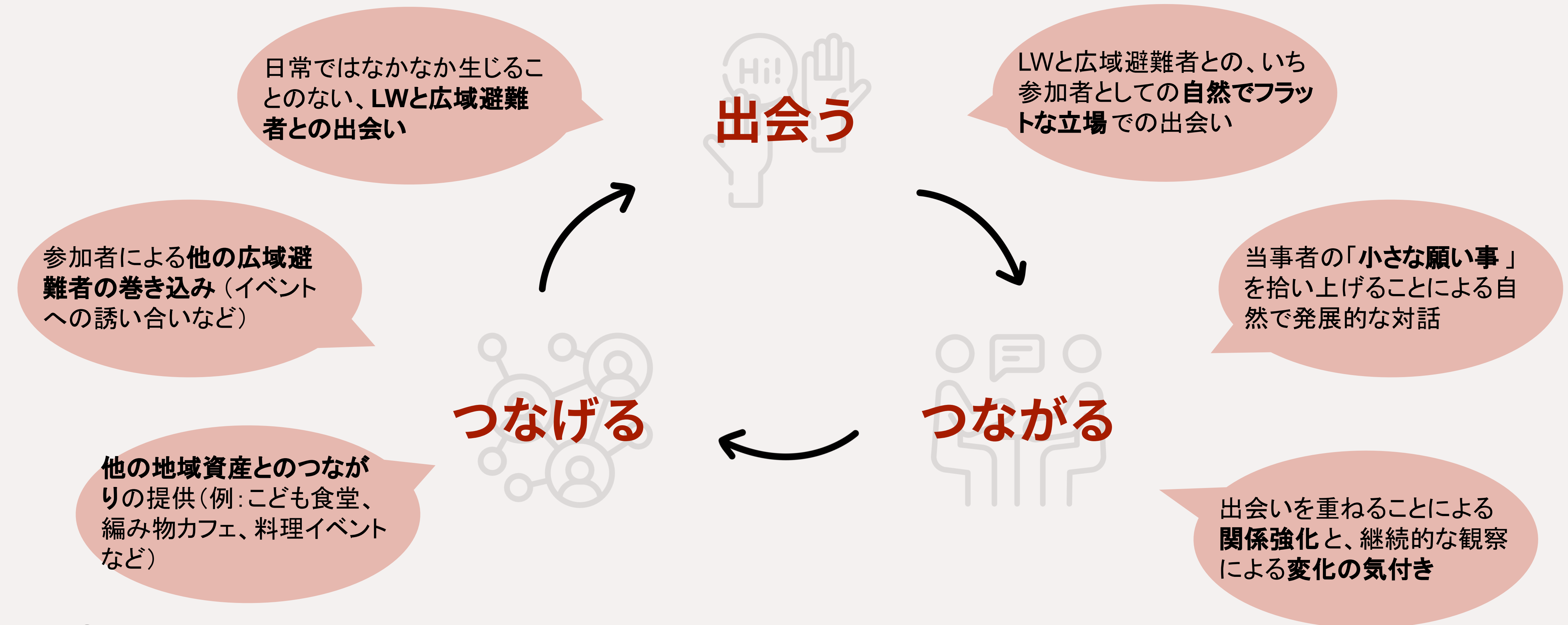
避難前に住んでいた地域への帰郷意向

被災前の居住地域への帰郷意向については、**帰郷の予定がない方々** (a+c) は52%を占めた。「わからない」との回答も相当数あった。



アウトカム - 市民リンクワーカーのモデル

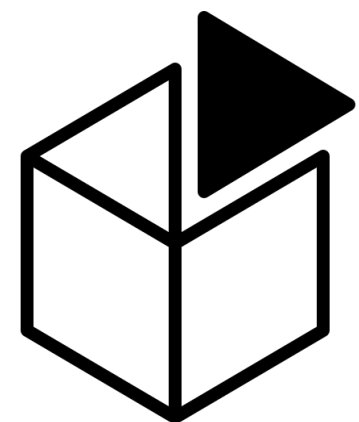
LWの「**出会う**」「**つながる**」「**つなげる**」の活動モデルは、
広域避難者に対する社会的処方として有効に機能していた。



LWの活動モデルがLW自身に与えた影響として、主に以下の4つが確認できた。
活動経験を積むにつれ、**LWとしての存在意義**がより明確に意識されていく様子も伺えた。

支援の隙間の補完

既存の縦割り構造でできないことを、個々のLWが**分野や立場を超えて**、必要とされるところに自ら関わりを持ち価値を届けることができた。



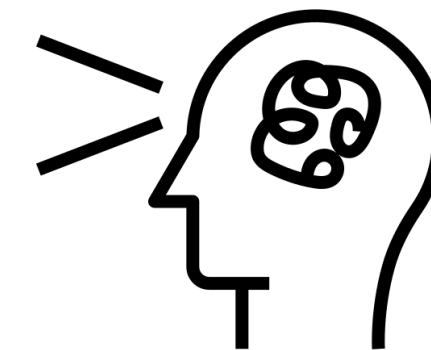
相互の信頼と学び合い

すべてのLWが互いの個性や多様な経験を**尊重**し合い、共感に基づく**信頼関係**を築くことができた。**仲間との出会いや協働を通じた学び合い**の重要性が強調された。



新たな視点の獲得

本業の活動における役割に捉われず、いち市民として当事者たちと関わることで、支援する/されるではないフラットな関係性など、**新たな視点**を獲得し実践することができた。



深い充足感

LWとしての役割と関係性が**深い満足感と充足感**を与えていた。「自分の人生にとって一番の出来事」「LW同士の関係性が心地良い」などの発言もあった。



アウトカム - 地域づくりの観点から

LWの変化と支援者コミュニティの広がり

- 本事業開始当初は、被災者支援を行う支援者自身が地域内の他の支援団体/支援者とつながることができず、孤立している様子が見られた。しかし本事業を通じて、共通の志を持つ支援者同士がつながる機会が生まれた。特にLWとして参画した6名は、『笑語ひろば』への参加、LWとしての実践と振り返りを繰り返す中で、共通体験が蓄積され、相互の信頼が深まり、活動への理解も深まるとともに、実践的なスキルが磨かれていった。
- またこのプロセスには、LWに加え、地域で被災者支援や居場所づくり、地域づくりを行う団体も参加しており、LW自身にとって多様な団体と「出会い」「つながる」機会となった。こうしたプロセスを通じて、支援者同士の関係性が強まり、支援者コミュニティが形成・拡張されると同時に、LWは主体的に活動を展開するようになった。
- 活動の本格化から半年を迎えた2024年4月を節目に、LWたちは新たな挑戦に踏み出している。例えば、自身が運営する市民団体で多世代の広域避難者と地域住民の交流の活動を開始した方、被災者の居場所づくりを目的に新たな任意団体を設立した方、本業で広域避難者への住居支援を始めた方もいる。いずれも自身のネットワークを活かし、ゆるやかに連携しながら活動の輪を広げている。

地域内連携の促進と新たなイニシアチブの創出

- LWが中心となり、地域の支援者や団体とともに「できること」を持ち寄り、場所・資金・人材・運営面で相互に補完し合いながら、さまざまな取り組みを起こし始めている。LW自身も、「一人では実現できなかったこと」が他者・他団体との連携によって形になる実感を得ており、それが次の行動の原動力となっている。
- 全体を俯瞰すると、本事業を通じて個々に活動していた地域の支援者がつながり、共通体験を重ねる中で信頼を築き、互いにエンパワーし合いながら各自の活動を深化・拡大させている。さらに支援者同士の連携によって、単独では実現し得なかった取り組みも実を結び、地域活動の新たな広がりが生まれている。
- このように本事業は、高齢の広域避難者への直接支援を超え、支援者や地域活動の担い手の発掘・育成、支援者コミュニティの形成・連携を促進し、地域づくり全体にも寄与する取り組みとなった。

考察と展望

STRICTLYCONFIDENTIAL



CROSS FIELDS

これまでの活動を通じた広域避難者との継続的な対話と事業評価を目的としたインタビュー調査によって、以下の課題・ニーズが明らかになった。

共通の痛みを抱える方々が安心して集える場に対するニーズ

震災から1年以上が経ち、広域避難者が地域住民と接する機会は増えているものの、自らの地域での在り方に戸惑い、疎外感を抱えるケースは少なくない。避難者からは、**同じ喪失体験をした被災者同士が安心して集まり、自由に交流できる場を求める声**が引き続き多く聞かれる。インタビュー調査でも、広域避難者から以下のような意見が寄せられた。

- 「地域包括支援センターが開催する地域サロンに参加したが、震災の話をしづらく感じ、被災者であることを隠して過ごしている。同じ痛みを抱えた能登の人同士が集いの方が安心して話せる」
- 「地域サロンに参加したが、コミュニティに溝を感じ、被災者であることを言うことが憚られる。被災者同士で集える場が欲しい」

支援の受け疲れと自発的な活動に対するニーズ

広域避難者が「支援を受ける立場」に慣れすぎると、本人のレジリエンスが損なわれる恐れがあることは、過去の災害復興でも指摘されてきた。実際、被災から1年が経つ頃には、支援への感謝とともに、「**いつまでも支援を受けてばかりではいけない」「そろそろ自分も何かしたい」「できることを探している**」といった声が多く聞かれるようになってきた。

こうした前向きな意欲を後押しする機会の提供は、避難者が自ら課題を乗り越える力を支えるとともに、支援への過度な依存によって生じる「支援疲れ」や、孤独・孤立のリスクを軽減する効果が期待される。被災者自身が主体となる活動も徐々に芽生え始めており、こうしたモメンタムを今後更に育て、広げていくことが重要である。

能登半島地震から2年を迎える2025年は、多くの避難者にとって「災害救助法」に基づく賃貸型応急住宅の供与期間が終了する節目であり、重要な決断を迫られる時期となる。これにより、発災以来複雑化・深刻化してきた課題が一層浮き彫りになると考えられる。こうした状況において、市民や地域が主体となり、社会的つながりを創出することで高齢の広域避難者の孤独・孤立を防ぐ本事業のような取り組みは、今後さらに重要となる。

当団体は、これまでの実績と35頁に記載した「今後に向けた課題」を踏まえ、以下の二つの展開を検討している。

高齢の広域避難者向けのコミュニティづくりを更に深め、広げる

深める

- 広域避難者の方々による主体的/自発的な場づくり
- 『笑語ひろば』とLWの活動を通じた人や地域に「つなぐ」活動の本格化

広げる

- 『笑語ひろば』の情報や機会を未だ届けることができていない方々への情報発信・アウトリーチの強化
- 近隣自治体の団体との連携による支援対象者層の拡大とコミュニティ形成の輪の拡大

「地域主体の社会的処方」モデルの他地域展開の可能性を検討する

本事業を通じて実践された「地域主体の社会的処方」モデルは、高齢者の孤独・孤立の予防において一定の効果を発揮しており、今後全国各地で深刻化が懸念される独居・高齢者の孤独・孤立予防においても有効なアプローチとなる得ると考えている。当団体は、今後、本モデルの汎用性や他地域への展開可能性を見据えつつ、地域特性に応じた実装方法の検討を進め、より広域的な展開の可能性を模索したいと考えている。



孤独・孤立対策の取り組みを始めて3年。今回、地域に入り、現場を持って活動することは、クロスフィールズにとって初めての挑戦でした。この半年間の取組は、市民リンクワーカーや地域の方々と共に歩んできた「共創」のジャーニーそのものでした。試行錯誤を重ねる中で、地域に共感の輪が広がり、確かな実践を積み重ねることができました。私たちだけではここまでの実践は到底成し得ず、協働の力によって活動が大きく広がり、深まったことを実感しています。これからも仲間とともに協働の輪を広げ、この取り組みをさらに発展させていきます。

NPO法人クロスフィールズ Co-Create事業統括/推進マネージャー 西川 紗祐未



「出会う」「つなぐ」そして「つながる」・・・この「リンクワーカー構想」を、金沢を中心とした第一期 市民ボランティアの6名の皆さんとひとつひとつ形あるものにしてきました。このプロセスで得た知見のみならず、喜びや驚き、哀しみや悔しさなど身体の内から掘り起こされたさまざまな感情、これらに正面から向き合った経験に、人生観や死生観を根底から揺り動かされました。どんな小さな声も、声にならない小さな願いも、耳をすませて掬い取れるようにようになりたいと心から思います。いつも傍らにいる信頼できる仲間とともに。

NPO法人クロスフィールズ シニアプロジェクトマネージャー 沖 依子



本事業では主に事業評価を担当しました。「笑語ひろば」の開催を通じて、7割以上の参加者が新たなつながりを築き、愛称で呼び合うような親しい交流への発展や、明るい表情への変化が見られました。必然的な出会いとつながりの創出が、孤独・孤立対策として有効であることが可視化されたことは大きな一歩です。一方で、同時に見えてきたのは生活の見通しが立たずに葛藤する広域避難者の方々の姿でした。そのような課題の解決に向けても、今後も市民リンクワーカーとの連携や多様な主体との協働を深め、地域における持続的なつながりの構築に努めてまいります。

NPO法人クロスフィールズ プロジェクトマネージャー 澤田 祐宜

アドバイザーからのコメント

本事業に伴走させていただきましたケアと暮らしの編集社の守本です。私は総合診療医としての臨床だけではなく、ここまでのキャリアの中で行政や非営利団体の立場からも孤独孤立を解消し、地域共生社会を実現するための取り組みを行ってきました。

震災の復興において、そのソフト面、特に孤独孤立は見過ごされがちでした。特に、集落ごと避難した仮設住宅ではコミュニティ機能が維持されるものの、広域避難ではマンションなどに点在されており、把握も難しい状況でした。今回は、クロスフィールズさんが現地のNPOや社協とも連携しながら、食や落語、お酒など現地の文化にも沿った能登の方々向けの定期的な居場所を行い、多くの方に参加いただきました。また参加された方を地域の中でのつながりを作るサポートをすること、さらには現地に暮らす方々（専門職・非専門職問わず）をリンクワーカーとして養成し、活動に伴走することも合わせて行いました。リンクワーカーの方々はすでに現地でもボランティアとして場を持っている方も多く、居場所活動と自分の活動をうまくリンクさせて、人を紹介しあったり、ネットワークが形成されたりと相互作用が生まれました。

保健や福祉の領域で課題になっているように、個別支援と人づくり・地域づくりをいかに連動させるかは孤独・孤立の文脈でも同様です。行政では縦割りでお金と人がつき、相互の連携がうまくいっていない例も多くみられます。本事業の特筆すべき点は、これらが連動したプロジェクトになっていることです。能登からの広域避難者を個別支援するだけではなく、場を作り、相互の関係性の中で自分に合った人とのつながりを作るよう支援しました。さらにリンクワーカーを育成し、市民と専門職の中間的な立ち位置のプレイヤーをエンパワメントし、お互いにエンパワメントするコミュニティになりました。単に1年間の実績だけではなく、地域の資産となり、複利のように地域に恩恵をもたらすはずです。今後もリンクワーカーが自分の活動に引き寄せて取り組みを継続するでしょうし、能登避難者はお互いに出会いながら誘い合い、活動がコミュニティ化していく可能性もあります。本事業は、長期的に見通し、種をまきつつ、単年度でも実績を挙げた素晴らしい取り組みになり、災害時の孤独孤立支援における今後の参考になるはずです。



一般社団法人ケアと暮らしの編集社
代表理事 守本陽一

医師。京都芸術大学院学際デザイン研究領域修了（芸術修士）・大学在学時から医療者が屋台を引いて街中を練り歩くYATAI CAFEや地域診断といったケアとまちづくりに関する活動を行う。

総合診療医として働く傍ら、2020年11月に一般社団法人ケアと暮らしの編集社を設立。社会的処方拠点として、商店街の空き店舗を回収し、本と暮らしのあるところだいかい文庫を運営。また、医療・介護・福祉・デザイン・アートとまちづくりを掛け合わせ、まちづくりとケアの橋渡し活動を行う。

END OF FILE

STRICTLYCONFIDENTIAL



CROSS FIELDS

- 内閣府. (2023). 孤独・孤立の実態把握のための全国調査.https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/zenkokuchousa/r5.html
- 岡本 昌子, 安齋 紗保理, 柴 喜崇. (2021). どのような社会活動が地域在住高齢者における社会的孤立と関連するか?. 日本予防理学療法学会雑誌 (抄録集), 2021(1.Suppl.No.1), 48.
- 山下 真里, 清野 諭, 野藤 悠, 菅原 康宏, 成田 美紀, 横山 友里, 西 真理子, 秦 俊貴, 北村 明彦, 新開 省二, & 藤原 佳典. (2021). 東日本大震災被災地における高齢住民の孤独感の実態とその関連要因. 厚生指標, 68(13), 33-39.